

名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.144

2005年5月

ニュース

平成17年度入学式が挙行される

平成17年度 名古屋大学入学式



目次

●ニュース

平成17年度入学式が挙行される	2
総長の辞（平成17年度大学院入学式）	4
総長の辞（平成17年度学部入学式）	6
来賓祝辞	8
齋藤 英彦（名古屋大学全学同窓会副会長／独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター院長）	
第4回経営協議会開催	10
三省堂書店から留学生に図書が贈呈される	10
本学から6名が平成17年度科学技術分野の文部科学大臣表彰を受賞	11
退職者表彰式等を開催	12
名古屋大学職員組合との団体交渉が行われる	12
VDT 作業講習会開催	12
平野総長が改修後の猪高町宿舎を視察	13

●知の先端

妊娠期・産褥期の気分障害（うつ病）に対する文理複合的研究	14
後藤 節子（医学部保健学科教授）	

●教育のデザインとプラクティス

工学部・工学研究科の特色 GP「創成型工学教育支援プログラム」	16
早川 義一（大学院工学研究科教授）	

●知の未来へー若手研究者の紹介

画像処理技術の開発とその医用画像処理への応用	18
森 健策（大学院情報科学研究科助教授）	

●学生の元気

名大祭の役割とは	19
村田 靖（名大祭本部実行委員会委員長／理学部物理学科3年）	

●職員から

名古屋大学の底力 松川 和彦（工学部・大学院工学研究科総務課長）	20
----------------------------------	----

●発展する名古屋大学

エコトピア科学研究所発足 松井 恒雄（エコトピア科学研究所長）	21
---------------------------------	----

●地域にひらく

地域防災力向上に向けた地域社会との連携協働 鈴木 康弘（災害対策室長）	22
-------------------------------------	----

●部局ニュース

情報文化セミナー・シンポジウムI開催	24
上田実教授日本学術会議会長賞受賞記念講演会を開催	24
東芝と研究インターンシップ協定を締結	25
世界トップレベルのスーパーコンピュータを導入	25
シンポジウム「まちとひとを守るために いま何をすべきか」開催	26
附属図書館が2005年春季特別展を開催	27
第8回博物館特別展「時を測る」開催中	28
法学研究科が国際大学生交流セミナー開催	29
附属農場が農業教育公園内に案内板を設置	29
大幸キャンパスグラウンドで少年サッカー教室開催	29

●新任役員・部局長等の紹介

資料	30
----	----

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成17年4月1日～4月15日	33
--------------------------------	----

●イベントカレンダー	37
------------	----

●ちょっと名大史	38
----------	----

名大史を見てきたクスノキ	40
--------------	----

平成17年度入学式が挙行される





平成17年度名古屋大学入学式が、4月5日（木）、豊田講堂において、大学院は午前10時から、学部は午前11時15分から挙行されました。

本年度の入学生は、大学院2,314名（博士課程前期課程1,603名、博士課程後期課程625名、大学院法学研究科専門職学位課程〔法科大学院〕86名）及び学部2,242名の計4,556名です。

名古屋大学交響楽団による奏楽（ワグナー作曲「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲）で始まった式典では、平野総長から、大学院入学生及び学部入学生それぞれに対し、辞が述べられました（詳しくは、総長の辞をご覧ください。）。また、大学院環境学研究科博士課程前期課程入学生の大濱敏樹さんと文学部入学生の河村瑛子さんが入学生総代として、入学に当たって、学生としての本分を全うすることを宣誓しました。

続いて、来賓として、名古屋大学全学同窓会副会長の齋藤英彦氏（独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター院長）から、ご自身の研究者生活に触れながら、先輩として心こもった祝辞をいただきました（詳しくは、来賓祝辞をご覧ください。）。

入学式終了後には、青空の下、豊

田講堂前に詰めかけた学生に、部活やサークルの勧誘を受けたり、保護者などと晴れやかな表情で記念撮影したりする入学生の姿が見られました。

入学式の様子は、シンポジオンホール及び豊田講堂ピロティにおいてライブ中継され、保護者らがスクリーンに映し出される映像を熱心に見つめていました。

なお、入学式の模様は、現在、本学のホームページ（<http://www.nagoya-u.ac.jp/index1s.html>）でも視聴することができます。



総長の辞（平成17年度大学院入学式）

平野 眞一



名古屋大学大学院に入学された皆さん、ご入学おめでとうございます。名古屋大学を代表して、皆さんのご入学を心から祝福し、歓迎します。

名古屋大学大学院は、本日ここに、博士課程前期課程1,603名、法学研究科専門職学位課程（法科大学院）86名、博士課程後期課程に625名、合計2,314名の入学生を迎えました。

皆さんは、本日から、それぞれが大学院生として学位あるいは資格を目指すスタートラインに着いたことになりました。

皆さんは、すでに4年あるいは6年以上にわたる学生生活を終えた後の入学であり、大学生活のあり方を理解した上での、更なる向学心による進学であります。

名古屋大学は、皆さんの高い志を大切に教育・研究の環境を提供します。本学は「大学院重点大学」として、教育・研究の環境整備に努めてきましたが、入学生数においても学部入学生数2,242名を上回る大学院入学生を迎えております。

名古屋大学は、前身としての医学校が設立されてからは約130年の歴史がありますが、総合大学としての創立以来約65年の比較的短い歴史の中で、多くの非常に優れた研究成果を産み出し社会に貢献する人材を育ててきました。そのような輝かしい成果を挙げてきたのは、名古屋大学の誇るべき自由闊達な学風のもとに、知の創造の源が優れた教育・研究者群の存在と自由な発想の奨励の重要性にあると深く信じて邁進してきたことにあると考えており、今後ともこれまでの伝統は大切にしていきます。

全国の国立大学は、昨年4月より国立大学法人として、新たな時代に入りました。大学は、優れた人材の育成と創造的な研究の遂行による貢献を社会から委託されており、そのための場所、資金が提供されております。したがって、私どもは、優れた教育・研究を行う義務を社会に対して負っております。名古屋大学は、「法人格を取得した大学」と

して自主的・自律的に、人間性と科学の調和的發展を目指し、人文科学、社会科学、自然科学をともに視野に入れた高度な研究と教育の創造的な活動を通じて、世界屈指の知の創成と将来を担う勇気ある知識人を育成することによって社会に貢献していきます。

名古屋大学は、優れた人材の育成、学問の発展、創造的な科学技術の創成、安全で高度な医療などにおいて社会に貢献できる我が国有数の大学院重点基幹総合大学であり、皆さんが誇りを持てる大学であります。

知の継承と次世代への文化の発展を支えるためには、異分野間での強い連携と協力関係の強化が必要であります。言うまでも無く、学術・文化は「人」が創造するものであり、「学」はまさに「HUMANITY」そのものであります。「学」の発展のためには、文系・理系の力強い連携が必須であり、総合大学としての名古屋大学はその特長を生かして、「人」を基軸とした活動をします。

「知の拠点」形成と継承・発展のためには、独創的な発想を持つことができる若手の育成が不可欠であります。これから社会のあるべき姿の一つは、年齢・性別などにとらわれず、多様な人材が尊ばれる、責任感を持った若手が目立ってよい環境を整えることであろうと思っています。

それが実現されてこそ、国内に留まらず海外に活きた情報が発信でき、真の国際化が実現されるのだと確信します。名古屋大学は、そのような人材育成に努めます。

大学院に入学された皆さんには、総合大学に学ぶ学生として、豊かな人間性を持つ国内外での指導的役割を担うリーダーとしての素養を身につけてもらいたいと思います。文系、社会系を専攻する方はもう一度理系の基礎を学び、理系を専攻する方は文系、社会系の基礎を身につけて社会の仕組みを学んでいただきたい。

人間性と科学の調和的發展を目指し、人文科学、社会科学、自然科学をともに視野に入れた高度な研究と教育を行う名古屋大学大学院に学ぶ皆さん、自分の分野の専門的な

学問のみに留まることなく、好奇心を持って他の分野の基礎素養を身につけるように努めてください。

皆さんは、学部生として学生生活を経験した上で、志を持っての進学ですので、「何のために、何を求めて名古屋大学大学院に入学したか」と尋ねる必要はないと思いたい。しかし、時に、「自分のある姿を見つけていない」「自分探しが出来ていない」学生さんに接します。「自分が求めるものは何か、最善を尽くすことが出来るものは何か」を早く見出し、その「夢と希望」に向かって果敢にチャレンジしていただきたい。

大学院は学部の単なる延長ではありません。「自分の頭で考え、答えを出し、行動する」習慣を身に付けましょう。と同時に、「世界で何が起きているか」に鋭い目を向けてください。あなた方の生活の基盤であり、将来の自分を置く社会なのです。「自分の IDENTITY」を確立してください。

大学院では特に、世界で誰もやっていない研究を行います。成果が出ず真剣に悩むこともあると思います。その苦悩が厳しければ厳しいほど、課題を解決し、あるいは新しいことを発見した時の喜びは大きいものです。課題を見つけ、情熱を持って果敢にチャレンジしてください。研究は、往々にして計画を立てたとしても予測どおりには進まず、頂上が見えない山に登るようなものです。登ったと思うと、また次より高い山が現れます。とはいえ、「知」を求め旅は厳しいけれども、また楽しいものです。

私も、修士課程の1年生のころに成果が出ず、自信をなくして、悩みこみました。しかし、自分の姿を失いかげながら、もう一度チャレンジする気持ちを戻して、物事を前向きに考えようと努めました。そうすると、面白いもので、成果も出るようになり、その成果に涙を流して喜んだことが、昨日のように思い起こされます。今の私の原点はそこにあります。

20世紀は、欧米に追いつき、追い越すために大きな努力が払われてきた時代であり、物質文明を飛躍的に発展させてきました。しかし、一方では、人間とのインターフェイスが弱かったために、人類全体に関わる幾多の問題が残されていることも事実であります。

今は、「人」を基軸においた、心の豊かさを大切にしたい安心・安全な持続可能な社会を構築するために、叡智を結集し行動する時期であります。国、大学、産業界は大きな転換期にありますが、目的と動機を失わず、勤勉・誠実に新しい時代を創り上げるために努力すれば、活力ある社会に再生することは可能であると確信しております。皆さんも、新しい社会の創生に向けて、我々とともに真摯に取り組んで下さい。皆さんは、今後の世界をリードすることが期待されている方々なのです。今や、私どもはグローバルゼーションの中でその存在を示さなければなりません。そ

のために、世界に通じる人間性と基礎学力に加えて総合力を身に付けていただきたい。

皆さん、キャンパス内では非常に多くの留学生に会うでしょう。名古屋大学には、約70ヶ国から1,200人を越える留学生が学んでおり、その数は全国の国立大学でトップクラスであります。キャンパスはまさに素晴らしい国際交流の場でもあります。積極的に留学生と交流し、お互いの言語や文化、歴史を学びあい、理解しあって下さい。留学生の皆さんは、日本の文化はもとより他の国の文化を学び、交流の輪を広げてください。グローバル化においては、人間関係は何にも勝るものであります。国際交流のためのツールでもあるコミュニケーションスキルを在学中に身に付けて、国際的にも活躍する基盤を築いてください。

7月末から8月初旬には、名古屋大学において「人間と自然との共存」と題して「人の営みと環境」に関する問題について議論する世界学生フォーラムが開催されます。また、世界から第一線の研究者を招待して、環境問題について討議する「万博記念国際フォーラム」を本学で開きますので、皆さん、ぜひフォーラムに参加して、自然と調和する人の営みについて考えましょう。人類の叡智でもって、自然と共生する社会を築きましょう。

終わりにもう一度皆さんにお伝えします。今後、受身の姿勢では学問をする情熱や喜びを感じることは出来ません。自ら問題意識を持って積極的に取り組んでこそ、真理を探究、知を創成する楽しみが生まれます。将来を担う皆さんに期待しています。新しい時代を創り出す「高い志」を持ち続けてください。

皆さんの今後の活躍と明るい将来を心から祈念しています。

以上をもって、大学院入学生への辞といたします。



総長の辞（平成17年度学部入学式）

平野 眞一



新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。名古屋大学は、本日ここに2,242名の学部入学生を迎えました。名古屋大学を代表して、皆さんのご入学を心から祝福し、歓迎いたします。

皆さんは、澁刺とした気分で、高い志を持ち、また胸躍らせてこのときを迎えられたでしょう。ぜひ、この気持ちを大切にしてください。大学も、皆様のこの気持ちを大切にしたい教育・研究の環境を提供します。

名古屋大学は、前身である医学校から始まって約130年、名古屋帝国大学として1939年の開学以来65年ほどの歴史の中で、多くの非常に優れた研究成果を生み出し、社会に貢献する人材を育ててきました。

そのような輝かしい成果を挙げてきたのは、名古屋大学の誇るべき自由闊達な学風のもとに、知の創造の源が優れた教育・研究者群の存在と自由な発想の奨励の重要性にあると深く信じて邁進してきたことにあると考えております。

国立大学法人法の制定に伴って、名古屋大学は、昨年4月から、国立大学法人名古屋大学として、「法人格を持った大学」となりました。国立大学法人となっても、「人間性と科学の調和的発展を目指し、人文科学、社会科学、自然科学をとともに見視野に入れた高度な研究と教育を実践し、将来を担う人材の育成と優れた研究の創造を行い、社会に貢献する」という名古屋大学によって建つ基本理念は不変であります。

名古屋大学は、優れた人材の輩出、学問の発展、先導的な科学技術の創出、安全な高度医療などにおいて社会に貢献できる我が国有数の基幹総合大学であり、皆さんが誇りを持てる大学であります。

皆さんが社会で活躍するための専門教育については、「研究重点大学」としての実績ある教育システムを準備しておりますが、同時に21世紀をリードする人材の育成には「教養教育」は欠かせません。名古屋大学では、全学の教員が

担当する「教養教育院」を設置し、教養教育を中核とする「全学教育」を行い、“研究と教育の創造的な活動を通じて、世界屈指の知的効果の創成と豊かな人間性を持つ勇気ある知識人”の育成に努めております。

既成概念にとらわれず、科学的・歴史的な知的財産を踏まえて、新たな分野、課題に果敢に挑戦すること、また自らの社会的な責任と役割を自覚して社会的弱者への思いやりを持ち、国内および国際社会における正義の実現に向けて行動する人間性を持った知識人を育てようとしております。

「学」はまさに「HUMANITY」そのものであります。「学」の発展のためには、人文科学、社会科学、自然科学の強い連携のもとに、名古屋大学では総合大学としての特長を生かし、人間性と科学の調和的発展を視野に入れた高度な教育と研究を行います。「知の拠点」形成と継承・発展のためには、独創的な発想を持つことができる若手の育成が不可欠であります。これからは、年齢・性別などにとらわれず、多様な人材が尊ばれる、若手が目立ってよい環境を整えることが必要であると思っています。それが実現されてこそ、国内に留まらず海外に活きた情報が発信でき、真の国際化が実現されるのだと確信しております。

我が国が抱える構造的な財政赤字の問題と相俟って、急速な少子化及び高齢化社会の到来など社会基盤の根幹に関わる問題、金融機関を始めとする大規模企業の合併・リストラ・失業・年金など生活基盤に関わる問題、そして無惨な事件に見られる不条理な問題など、ことさら終末感を思わせるような問題があります。これらの現実に触れるたび、かつてないほどの不確実性や閉塞感に戸惑いを感じている人は多いと思います。このような社会環境下で育った皆さんは、程度の差はあれ、多くは内面に心許ない存在感を抱えながら大学に入学してこられたかもしれません。皆さん、ここで、「生を受けて学ぶことが出来る今ある自分の環境に感謝」とするとともに、今一度胸に手をあてて自問してみ

て下さい。「何を求めて、何をしたいと名古屋大学に入ってきたか」と。「自分が最善をつくすものは何か」を早く見出し、その夢を実現するよう努力していただきたい。

「人生の実りは、日頃から貴方がどんな種子を蒔いたか」が重要です。「人生の種子」とは「考え方」あるいは「心構え」といってよいかも知れません。自分の人生という畑に責任をもって、種子を蒔きましょう。

当然ですが、大学への入学は目標ではありません。「夢と希望」を叶える過程の一里塚です。どういう過程を経て最終目標に到達するのか、その道筋を立てましょう。「夢と希望」は人生を活力に満ちたものにします。決して平坦ではないこの人生を、より良く生きていこうとするならば、「夢と希望」を持ち、目的の達成に向けて地道な努力を続ければ、皆さんが進む道は大きく開けます。

大学では、何かを漫然と待つのではなく、自分から求めて積極的に行動してもらいたい。受身の姿勢では学問をする情熱や喜びを感じることは出来ません。自ら問題意識をもって積極的に勉強し、行動してこそ、知の探求、真理を探究する楽しみが生まれます。

講義では、これまでに人間が人文と社会と自然の諸現象を観察し、理論化し、体系づけてきた学問体系の形成過程を教え、専門的な知識に裏付けられた批判的な思考力と構成力を養うようにしていきます。いまだ分かっていないことがどれだけ多くあるかを知ることになるでしょう。これは皆さんの好奇心を刺激し、学習意欲を掻き立てることになるでしょう。

と同時に、現在、世界で、日本で何が起きているかに、鋭い目を向けてください。我が国の将来を担うのは皆さんです。希望の持てる社会にしなければなりませんし、国際的にも責任ある国にしなければなりません。

名古屋大学には、約70ヶ国から1,200人以上の留学生が学んでおり、その数は国立大学ではトップクラスであります。キャンパス内では、接する留学生から、その国の言語



はもとより、歴史、文化や宗教などを学べるチャンスが一杯です。キャンパスは、まさに素晴らしい国際交流の場です。グローバル社会においては、人間関係はどんなものより大切であります。留学生には、名古屋大学に留学して満足してもらえる環境を整えたいし、日本人学生には国際的に活躍できる基礎を築いてもらいたい、と思います。在学中に、異なる国の方々と議論できるコミュニケーションスキルを身に付けてください。

7月29日から8月8日には、名古屋大学は、世界から学生をあつめて「人間と自然の共存」と題して世界学生フォーラムを開催します。また、8月7、8日を中心に、名古屋大学で「環境と人の営み」に関する万博記念国際フォーラムを開催し、世界の研究者と直面して環境問題について討議いたします。皆さん、ぜひ参加してください。国際交流と共に、安全・安心で持続可能な社会の構築に向けて動きましょう。世界の学生・研究者と手を携えて自然との調和を考えましょう。

皆さんは、今後、このような教育・研究環境のなかで学んでいくこととなりますが、新しい時代を創り出す「高い志」を持ち続けて積極的に学んでください。学生生活のもう一つの重要な活動は、多くの教員と交流し、人生の機微を学ぶとともに、互いに心から信頼しあえる真の友人を作ることです。

また、大学は、ただ単に知識の吸収の場であるばかりでなく、全人教育の場でもあります。全人教育にあっては、課外活動である部活動が果たす役割は大きいものです。最近、ややもすると人間関係が希薄であるといわれておりますが、部活動では、同僚間、又卒業生の会等を介して広い世代の人間との交わりがあり、今後の人生において大切な財産になります。名古屋大学は、運動関係の部活動が活発な文武両道に通じる人間教育を目指している大学のひとつであり、全国大会でも活躍しております。

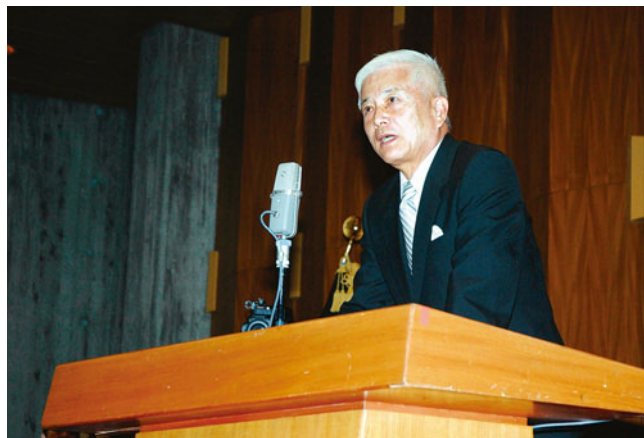
「学習」する意欲を失わず、同時に部活動などを通じて実りある大学生を送り、総合大学の学生として良い人間関係を築き、心身を磨き、学問的にも人間的にも大きく成長されることを期待しています。

皆さんの今後の活躍と明るい将来を心から祈念しています。

以上をもって、入学生への辞といたします。

来賓祝辞

名古屋大学全学同窓会副会長
 独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター院長
 齋藤英彦



平成17年度大学院入学式

皆さん、こんにちは。大学院へご入学、おめでとうございます。全学同窓会を代表いたしまして、心からのお祝いと歓迎の意を表します。多くの方は他の大学を卒業して名古屋大学の大学院へ進学されたと伺っております。異なる経験を持つ人々、いろいろなバックグラウンドを持つ人々が混じることは、お互いに刺激になって大変よいことであると私は思っております。

名古屋大学には従来から各学部の同窓会がありましたが、全学の横断的な同窓会はありませんでした。しかし国立大学の使命とあり方が大きく変わる時代を控えて、平成14年の秋に全国の国立大学としては初めて大学及び大学院の卒業生、留学生、大学関係者などすべてを含む全学同窓会が設立されました。同窓会は、「大学と社会とを結ぶ必須の組織として、名古屋大学の発展と社会への貢献を図り、会員相互の親睦、交流」を目的としています。私も卒業生は、関東でも関西でもないこの中部の地において、自主独立の志と自由な学風を尊び、すぐれた教育研究、人材育成を行ってきた名古屋大学に非常な誇りを持っております。現在、会員数10万人と全国に3支部を擁し、上海などの海外支部設立も準備中であります。本日、皆さんを仲間として迎えることは、大きな喜びであります。

皆さんは大学卒業後、さらに専門分野の学問を続けるために大学院へ進学されたと思います。どのような夢と目標を持って入られたでしょうか。社会人となる前に準備期間として、あるいはちょっと一休みするために進学した人も少しはいるかもしれませんが、多くの人は分野を問わず、新しい情報、新しい技術の創造を目標としていると思います。

私は昭和39年に医学部の大学院へ入学し、内科学教室で白血病などの血液癌の臨床と研究を始めました。昔はほとんどすべての癌は不治の病で、外科手術で切除することが

できない場合は100パーセント死を意味していました。無制限に増殖する性質を持ち、全身に転移する癌細胞を薬でコントロールすることは不可能と考えられていました。私が大学院在学中の1966年に、シカゴ大学のチャールス・ハギンズという研究者がノーベル医学生理学賞を受賞しました。受賞の理由は、その時代の常識を破ったことで、私の記憶に強く残っております。彼は外科医として前立腺癌に興味を持ち、研究を進め、男性ホルモンが前立腺癌の増殖を促進すること、逆に男性ホルモンを除去すれば前立腺癌が縮小することを見つけました。その後、乳癌も女性ホルモンに依存して発育すること、女性ホルモンをブロックすることにより乳癌の治療ができることを発見しました。すなわち薬により進行癌が治療できることを初めて確立した点で、大きなインパクトを与えました。

ハギンズは1週間に70時間は実験室で過ごしたという努力家で、部屋の壁に「ディスカバリー・イズ・アワー・ビジネス (Discovery is our business)」というモットーを掲げていたそうであります。そして彼は研究をするためには、3つのH、すなわちヘッド (Head)、ハンド (Hand)、ハート (Heart) が不可欠であると述べております。私はハギンズの言葉を皆さんに贈りたいと思います。つまり頭と手をフルに使い、情熱を持って楽しく研究することあります。学部と比べ、大学院では教員との交流の機会が、より密になると思います。古い表現では警咳に接するであります。大学院では知識、技術を学ぶと共に、先生や友人との交流を通じて、人生観、倫理観、態度を磨いてほしいと思います。若いときには時間はいくらでもあると錯覚しがちですが、時間は無限にはなく、無駄にしないで有意義な大学院生活を送られることを期待します。本日はおめでとうございます。



平成17年度学部入学式

皆さん、こんにちは。名古屋大学へのご入学、おめでとうございます。全学同窓会を代表いたしまして、心からのお祝いと、そして皆さんを仲間として歓迎いたします。また今日まで皆さんを支えられた周囲の方々にも心からお祝いを申し上げます。

名古屋大学には従来から各学部の同窓会はありましたが、全学の横断的同窓会はありませんでした。しかし国立大学を取り巻く状況が大きく変わる時代を控えて、平成14年秋に全国の国立大学としては初めての試みとして、卒業生、留学生、大学関係者などすべてを含む全学同窓会が設立されました。同窓会は、「大学と社会とを結ぶ必須の組織として、名古屋大学の発展と社会への貢献を図り、会員相互の交流」を目的としています。私ども卒業生は自主独立の志と自由な学風を尊ぶ名古屋大学に非常な誇りを持っております。現在、会員数10万人と関東、関西など3支部を擁し、上海などの海外支部設立も準備中であります。皆さんに直接関係する活動としては、学生生活や学生を対象とした講義の支援などを行っております。

さて、これからの名古屋大学における4年間は皆さんの一生にとり、かけがえのない大事な時代であります。人の一生のうちで最も心身共に成長する時期であります。理系、人文、社会科学系のどの分野においても、知識、技術は膨大で、かつ日進月歩するので、大学で学ぶことには限りがあります。また卒業して5年もたてば、役に立ちません。私は42年前に医学部を卒業しましたが、このことを身に沁みて体験しました。従って大学では、勉強のやり方を学ぶ。情報を集め、整理して、どのように活用するかという考え方や方法を学ぶことが重要になると思います。また大学では単に講義を聞き、それを暗記するのみではなく、自分の頭で考え、疑問があれば自分で解決する習慣をつけることが重要であります。つまり大学入学までの勉強法とは根本

的に違い、自分で考える習慣をつける、百科事典のような知識ではなく、学問をする方法を学ぶことであります。また世界はますます狭くなり、ボーダーレスの時代になります。外国語を身につけることの重要性は言うまでもありません。さらに大学では知識、技術のみを吸収するのではなく、先生や友人との交流から人生観、倫理観、態度が形成され、生涯の友人に会う時期であります。特に総合大学としての名古屋大学の長所を生かして、部活などに積極的に参加して、他学部、他学科の友人を作ることをお勧めします。

最近、世の中は殺伐として、日本人は品がなくなりました。自分さえよければよいという人が多くなり、金、詐欺、偽札の話が氾濫しています。このような時代にあたり、皆さんには読書、先生や友人との交流により、他人の痛みの分かる人になってほしい。人のことを配慮することが習慣となるようにしてほしいと希望します。

私は皆さんに先輩として、19世紀の英国人ウィリアム・ワーズワースの言葉、「プレーン・リビング・アンド・ハイ・シンキング (plain living and high thinking)、質素な生活と高邁な理想」を贈りたいと思います。彼は田舎に住んで、自然との一体感を持って、平明な言葉で多くの作品を発表した詩人ですが、すでに200年前においてもプレーン・リビング・アンド・ハイ・シンキングは困難なことを嘆いております。どの時代にも変わらぬ永遠のモットーと言えましょう。皆さんの学生生活が充実したものになることをお祈りしまして、私の挨拶とします。本日はおめでとうございます。

第4回経営協議会開催

平成16年度の第4回経営協議会が、3月26日（土）、名古屋市内のホテルを会場として開催されました。

経営協議会では、平野総長のあいさつの後、平成17年度年度計画、同年度学内予算配分等について、各担当理事から説明が行われ、了承されました。



経営協議会の様子

続いて、本学の国際交流の現状について、担当理事から資料をもとに説明が行われ、最後に、平成17年度の開催スケジュールを確認し会議を終了しました。

学外委員からはそれぞれの議題について、大所高所からの貴重なご意見が多数寄せられ、予定時間の2時間も短いようでした。

なお、平成17年度第1回経営協議会は、学内において開催し、学外委員の方々に学内の諸施設等を見学していただく予定です。

三省堂書店から留学生に図書が贈呈される

株式会社三省堂書店から、本学に在籍する私費留学生を支援するため、学習・研究用図書贈呈の申し出があり、4月15日（金）、同社常務取締役の鈴木良介氏他3名が本学を訪れ、4名の留学生に図書が贈呈されました。

これは、「三省堂書店私費外国人留学生学習援助制度」の一環として、10年前から関東、関西地区で実施されてきたもので、今年初めて名古屋地区に事業拡大するに当たり、本学の留学生に贈呈されたものです。

鈴木常務取締役からは、「日本で学ぶ優秀な留学生に学習費の一部を援助することを目的として図書を進呈している。このことが、今後の日本と母国との架け橋となる優秀な人材を育成する一助となれば幸いです。この図書を使って、今後とも研究活動に一層打ち込んでいただきたい。」とあいさつがありました。

これを受けて、留学生の代表から、「研究のためには、本はとても大切なものです。図書を寄贈いただくことは、大変な助けになります。この図書を使って、ますます研究に頑張ります。」と抱負と感謝の意が述べられました。また、山本副総長からも、感謝の意とともに、産学官連携の面でも関係を深めていきたいとあいさつがありました。



留学生に図書を贈呈する鈴木(株)三省堂書店常務取締役

本学から6名が平成17年度科学技術分野の 文部科学大臣表彰を受賞



平成17年度科学技術分野の文部科学大臣表彰が、4月13日（水）、発表され、本学からは、科学技術賞の研究部門で、福田敏男工学研究科教授、高木直史情報科学研究科教授の2名、若手科学賞で、山口茂弘理学研究科教授、西澤典彦工学研究科助手、三村耕一環境学研究科助手、川合伸幸情報科学研究科助教授の4名が受賞しました。

この表彰は、科学技術に関する研究開発、理解増進等において顕著な成果を収めた者について、その功績を讃えることにより、科学技術に携わる者の意欲の向上を図り、もって我が国の科学技術水準の向上に寄与することを目的として、今年度より始められたものです（なお、科学技術の分野において優れた業績を挙げた者に対し、昭和34年度から科学技術功労者等の表彰が行われていました。）。今回、本学の教員が受賞した科学技術賞の研究部門は、我が国の科学技術の発展等に寄与する可能性の高い独創的な研究又は

開発を行った者を対象とし、また、若手科学賞は、萌芽的な研究、独創的視点に立った研究等、高度な研究開発能力を示す顕著な研究業績を挙げた40歳未満の若手研究者を対象としています。

なお、科学技術賞、若手科学者賞の表彰式が、4月20日（水）、虎ノ門パストラルにおいて行われ、小島文部科学副大臣から表彰状が授与されました。

[科学技術賞 研究部門]

氏名	所属・職名	業績名
福田 敏男	大学院工学研究科教授	ロボットの知能化と微小領域ロボット操作への応用の研究
高木 直史	大学院情報科学研究科教授	集積回路向き高速乗算回路の研究

[若手科学賞]

氏名	所属・職名	業績名
山口 茂弘	大学院理学研究科教授	有機化学分野における革新的エレクトロニクス材料の創製研究
西澤 典彦	大学院工学研究科助手	工学分野における超高速非線形ファイバ光学の研究
三村 耕一	大学院環境学研究科助手	地球科学分野における有機物の無機化学進化の研究
川合 伸幸	大学院情報科学研究科助教授	認知科学分野における進化的・発達の観点からの記憶の研究

退職者表彰式等を開催



記念撮影

名古屋大学退職者表彰式が、3月30日（水）、豊田講堂第一会議室において挙行されました。

これは、平成17年3月31日付けで退職される勤続30年以上の職員を表彰するもので、表彰式には、被表彰者33名のうち27名が出席し、平野総長から被表彰者一人一人に表彰状と記念品が手渡されました。続いて、平野総長から祝辞があり、永年にわたる本学への尽力に対する感謝のことばが述べられました。

引き続き、ユニバーサルクラブにおいて、名古屋大学退職職員懇談会が開催され、上記被表彰者のほか、3月31日付けで定年により退職される職員をはじめ関係者が出席しました。山下理事のあいさつの後、退職者を代表して高木工学部・工学研究科事務部長から謝辞が述べられました。退職者は、出席者と今日までの思い出などを語り、別れを惜しんでいました。

名古屋大学職員組合との団体交渉が行われる

国立大学法人となって初めてとなる大学と職員組合との団体交渉が、4月12日（火）、本部第2会議室において行われました。

この団体交渉は、昨年12月28日に締結した「団体交渉に関する労働協約」に基づいて、大学側、職員組合側から、それぞれ8名の交渉委員が出席して行われました。

初めに、平野総長から、2年目を迎えた国立大学法人を取り巻く現状と諸課題及び本学が取り組む姿勢について、また、職員組合からの要求としても挙げられていたパートタイム勤務職員の忌引休暇の有給化、育児・介護法による子の看護休暇の充実化、東山地区保育所の建設、苦情処理制度の発足及び夏季休暇制度拡充についての所信が表明さ

れました。その後、「人事院による『給与構造の基本的見直し』（案）に対する本学の取り組みについて」を含む職員組合か



所信を表明する平野総長

らの要求7項目について、項目ごとに、職員組合側の交渉委員が要求趣旨を説明し、これに対して大学側の交渉委員が見解を表明した後、質疑応答を行う形で進められ、白熱した交渉となりました。

VDT 作業講習会開催



講演する宮尾情報連携基盤センター教授

VDT 作業講習会が、3月17日（木）、シンポジオンホールにおいて開催されました。

この講習会は、職場での VDT 作業者の増大や VDT 機器の多様化に対する作業環境整備の必要性から、職員に対する安全・衛生教育の一環として実施されたものです。

講習会では、環境安全担当の中島理事のあいさつの後、医師でもある宮尾 克情報連携基盤センター教授から、「VDT 作業における労働衛生管理～パソコン作業を快適に～」と題して、快適 VDT 作業のポイントについて講演がありました。同教授は、快適作業のポイントとして、①照明・採光の管理、②姿勢（椅子、机、パソコンとの距離等）、③作業時間管理等の重要性を挙げ、特に、パソコン画面との距離は、目の疲労を防止する上で、重要なポイントであると説明しました。また、VDT 作業と労働災害や過重労働、メンタルヘルス問題の関係についての説明もあり、有意義な講習会となりました。

平野総長が改修後の猪高町宿舎を視察

平野総長は、3月16日（水）、山本理事、若尾理事等とともに、改修された名古屋大学高針団地猪高町宿舎を視察しました。

猪高町宿舎は、地下鉄東山線一社駅から徒歩で7、8分という便利な地に昭和48年に建設されました。この施設は、名古屋大学職員及び名古屋工業大学職員の独身寮として多くの職員の居住の場として提供されてきましたが、築32年を経過した近年では、老朽化と狭隘から利用度が減少してきました。

一方、本学の外国人研究者の受け入れは、年々増加の一途を辿り、受け入れ宿舎として用意されているインターナショナルレジデンス等でも住居数が不足している状況でした。

この状況を打開するため、利用度が減少している猪高町宿舎の一部を法人化を機に、外国人研究者のために改修し、転用することで、施設の有効利用と国際交流の促進を図りました。

平野総長は、改修された2階の共同利用スペース、外国人研究者居室等を丹念に見て回り、施設担当者への質問等を交えながら、今後、外国人研究者が十分満足して居住できるような管理運営について、関係者を激励しました。

●主な改修箇所

共通事項：内・外装全面改修、照明器具更新、自転車置場増設

補食室：ガスコンロ・電子レンジ対応

トイレ：洋式化（一部）、ブース

外国人研究者用居室

内装全面改修：洋室化（畳→フローリング）

空調機、照明器具、網戸装備、什器類の整備等

●建物の概要

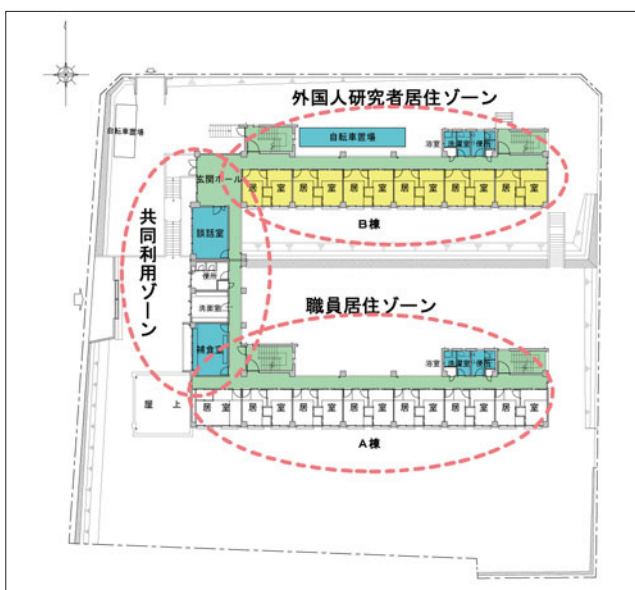
鉄筋コンクリート造 5階建

建築面積 593㎡

延べ面積 2,549㎡

外国人研究者用個室 26室

職員用住戸 35戸（世帯用1戸含む）



配置図兼一般階平面図



B棟南側外観（改修前）



B棟南側外観（改修後）



居室（改修前）



居室（改修後）

妊娠期・産褥期さんじょくの気分障害（うつ病）に対する文理複合的研究

後藤 節子 医学部保健学科教授

女性の妊娠・出産に伴う気分障害（うつ病）が注目されていますが、最近の調査研究では、妊娠期およびお産後（産褥期さんじょく）にうつ病を発症する割合は、10%以上にもなります。うつ病には抑うつ気分や意欲低下が伴うため、お産後のうつ病の発症は子どもへの働きかけが乏しくなり、子どもの認知のおよび情緒的発達への影響が生じかねないことが、懸念されます（Murrayら、1992）。私達の研究でも、妊娠期・お産後の女性は全体的に抑うつ状態にあること、お産後の産褥うつ病は育児不安、児童虐待に関連する要素があることが判明しつつあります。しかし、日本では産後うつ病と子どもの心身の発達との関連性を調査した研究は皆無です。

産褥うつ病の発症には、各個人の持つ遺伝的要因と、妊娠・出産による女性ホルモンの急激な変動、家庭と仕事の葛藤などの心理社会的問題の関与など、生理的・心理的大転換による環境要因の二つが推測されます。

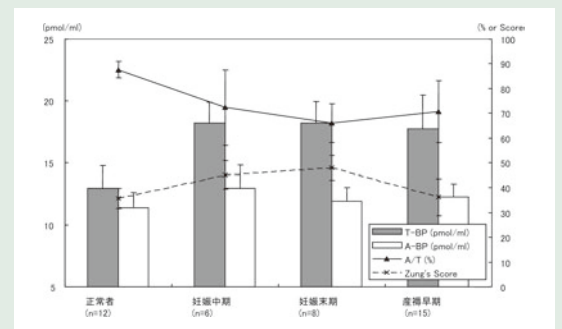
本研究は各専門分野の研究者が協力して、産褥うつ病の病態生理、成因の解明と、子どもの発達に与える影響を検討し、この時期の女性の精神的健康への支援策の確立を目指す文理複合的研究です。高等研究院タイプⅢのプロジェクト『ジェンダー・ストレス・モデル構築のための文理複合的研究』として2003年10月からスタートしました。現在までの解析結果を紹介致します。

図1)は妊娠期・産褥期の女性の抑うつ状態と生物学的抑うつマーカーであるビオプテリン測定値の推移を示します。(ビオプテリンは活性型と非活性型に分けられますが、うつ病患者では総ビオプテリン値は上昇し、活性率が低下します)妊娠

中の総ビオプテリン値は、中期にすでに対照群より上昇し、産褥まで継続しています。活性率（活性型ビオプテリン／総ビオプテリン）は妊娠中期にすでに減少しており、妊娠末期にはさらに減少し、産褥期までこの状態は継続します。

一方、Zung自己記入式質問紙による抑うつスコアは、妊娠末期に平均48点と最も強く出現し（日本人の正常平均値は35点）、産褥期には回復します。このように、妊娠期・産褥期の女性は抑うつ状態が存在することが、ビオプテリン測定およびZungスコアから示唆されます。

図1) 妊娠期およびお産後の血液中ビオプテリン値とZung抑うつスコア（正常者との比較）

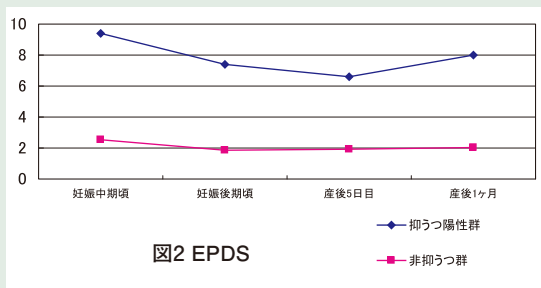


T-BP：総ビオプテリン；A-BP：活性型ビオプテリン／総ビオプテリン；正常者：妊娠をしていない健康女性

図2)は産褥期うつ病の心理的尺度であるエジンバラの産後うつ病自己評価表によるEPDS得点を示します。うつ傾向のある妊産婦さん（抑うつ群）は抑うつ傾向の無い群（非抑うつ群）の妊産婦さんと比較すると、いずれの時点でも、抑うつ傾向にあることが証明されました。特に抑うつ群の妊娠中期における平均値は、臨床的なカットオ

フ値をこえる抑うつ状態を示しました。

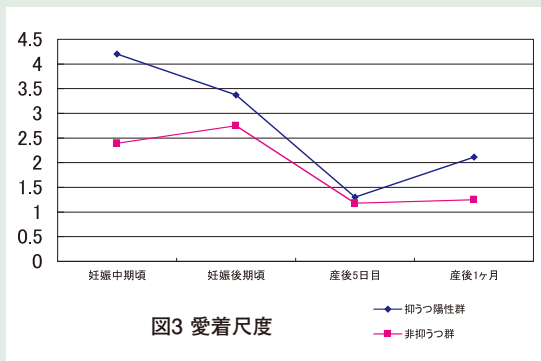
図2) エジンバラ産後うつ病調査表スコア (EPDS) の推移



抑うつ陽性群：観察中に一度でもカットオフ値を超えた群
非抑うつ群：観察中にカットオフ値を超えなかった群

図3) 次に、愛着尺度得点との関連をみますと、妊娠中期では、抑うつ群が非抑うつ群に比して、有意に高値でありました。つまり、抑うつ群は児に対する愛着が成立しにくいことを示唆しました。

図3) ボンディング質問表（児への愛着尺度）スコアの推移



抑うつ陽性群：観察中に一度でもカットオフ値を超えた群
非抑うつ群：観察中にカットオフ値を超えなかった群

抑うつ群における心理社会的要因の特徴に関しては、一般にうつ病で言われている養育体験、パーソナリティ傾向、ソーシャルサポートに関する知見が、産後うつ病の場合にも、ほぼ適合すると結論づけることが可能ではないかと考えられる結果を得ています。

今後、対象者を増やし、さらにゲノム解析および生理学的分析も加えることで、妊娠中・産後うつ病の成因と病態生理、さらに産後うつ病が子どもの発達に与える影響について検討します。これにより妊産婦および子どもの精神的健康とその支援策のあり方を明らかにしていくことが十分可能になると考えます。

この研究は以下の本学の方々と共同研究であることを併記します。

- 大学院教育発達科学研究科（社会心理学）
教授 金井篤子
- 大学院生命農学研究科（内分泌神経生理学）
助教授 東村博子
- 発達心理精神科学教育研究センター（児童精神医学）
助教授 村瀬聡美
- 大学院医学系研究科（精神医学・遺伝学）
教授 尾崎紀夫

- 1944 愛知県西尾市生まれ
- 1969 名古屋大学医学部医学科卒業、大垣市民病院研修医
- 1970 名古屋大学医学部産婦人科学教室入局（非常勤医）
- 1977 名古屋大学医学部助手（産婦人科学）
- 1981 名古屋大学医学部講師（産婦人科学）
- 1993 名古屋大学医療技術短期大学部教授（看護学科）
- 1997 名古屋大学医学部保健学科教授（看護学専攻）現在に至る

- 1981. 5 日本産婦人科学会総会宿題シンポジスト（絨毛性腫瘍）
- 2006. 11 日本母性衛生学会総会主催予定
- モットー：昨日よりも今日一歩まえへ進む
- 趣味：庭に花を咲かせること

ごとう せつこ



工学部・工学研究科の特色 GP 「創成型工学教育支援プログラム」

早川 義一 大学院工学研究科教授

平成15年度「特色ある大学教育支援プログラム」(以降、「特色 GP」と略す)に採択された名古屋大学工学部・工学研究科の「創成型工学教育支援プログラム」について紹介します。(「特色 GP」の詳細については大学基準協会のホームページ <http://www.juaa.or.jp/> をご覧ください。)

「創成型工学教育支援プログラム」は、学生自らが課題を発見し、多様な視点からその本質を見極め、幅広い専門知識を統合して解を見出す能力を涵養する「創成教育」を、学部から大学院にわたるそれぞれの段階に応じたカリキュラムを立案し実施することを内容とするものです。

このプログラムの中では、「手引書のない学生実験」(電気系学科、平成3年より)、「卵落とし」(機械系学科、平成6年より)など、学部教育における勉学の動機付け、主体性、創造性を育むことをねらって、各学科履修コースでそれぞれ工夫を凝らした20を超えるデザイン型科目を企画、実施していますが、最大の目玉であり、他に類のないユニークな科目が大学院の「高度総合工学創造実験」です。この実験について、少し詳細に紹介します。

「高度総合工学創造実験」は、“異分野交流によ

るシナジェティック効果”と“企業における研究開発の視点”をキーワードに、修士1年生を主な受講対象者として、企業の技術部長、主任研究員等の研究開発指導経験者(ディレクティングプロフェッサー:DP)が掲げる大テーマに対して、専攻、研究科、大学を越えた異分野の学生たちがグループを形成し(1グループ約5名)、学生たち自らが具体的な課題を設定し、解決策の立案、検証のための実験計画・実施を行うものです。この実験は、平成8年より試行、平成13年より本格実施されており、平成16年度にはDP8名、グループ数14(前期7グループ、後期7グループ)、受講生は65名(修士課程1学年の約1割に相当)で

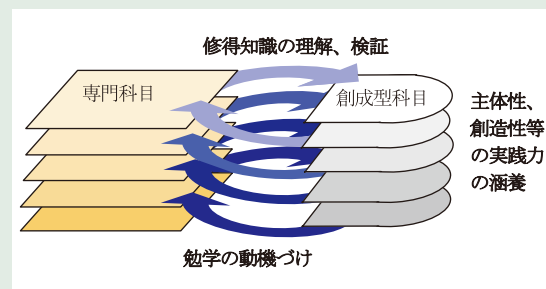


図1 工学部・工学研究科が考えている「創成教育」

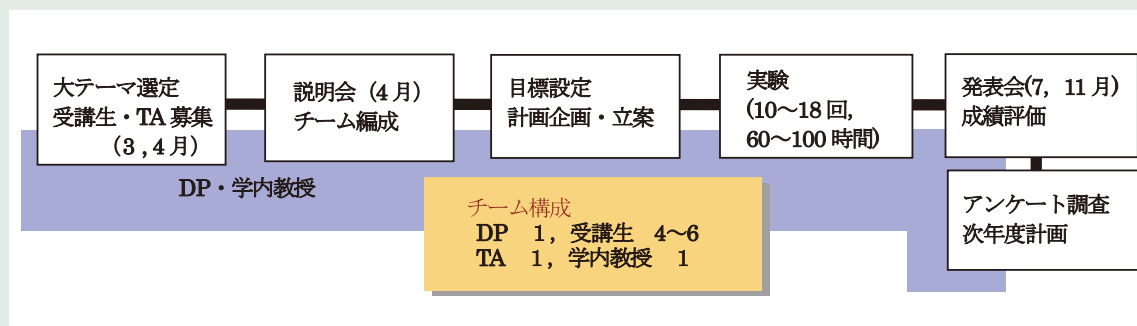


図2 大学院の創成型科目「高度総合工学創造実験」の流れ

*特色ある大学教育支援プログラム(特色 GP)

大学教育の改善に資する種々の取組のうち、特色ある優れたものを選定し、選定された事例を広く社会に情報提供することで、今後の高等教育の改善に活用します。これにより、国公立大学を通じ、教育改善の取組について、各大学及び教員のインセンティブになるとともに、他大学の取組の参考になり、高等教育の活性化が促進されることを目的とするものです。本学は、平成15年度の「創成型工学教育支援プログラム」(取組部局:工学部・大学院工学研究科)、平成16年度の「教員の自発的な授業改善の促進・支援-授業支援ツールを活用した授業デザイン力の形成-」(取組部局:高等教育研究センター)と2年連続で採択されています。

実施されています。これまでに受講生を発明者とする4件の特許が誕生しています。運営体制など、改善すべき点も多々ありますが、企業人DP、学内教員、創造工学センター、技術部など、関係各位の理解と協力を頼って、大テーマ数や受講生数は年々増加の傾向にあります。受講生やTAのアンケートでは、「工学を総合的に見る視点を学ぶことができ有意義であった」、「企業での発明・発見の体験ができてよかった」、「経済的な視点から研究開発を行う経験ができた」、「自分の専門が活かされた」など、多くの肯定的な回答が得られており、このことが企業人DPや関係教職員のドライビングフォースになっています。

「創成型工学教育支援プログラム」が平成15年度特色GPで採択された理由は「明確な理念のもとに我が国における先導的な工学教育がなされており、すでに実績も積まれていて、社会からの評価も高く、他の大学の参考になる優れたモデルである」と公表されています。この成果は工学部・工学研究科教職員の教育・研究に対する不断の努力の賜物であり、今後とも、名古屋大学発の創成型工学教育の益々の発展が期待されています。

「創成型工学教育支援プログラム」の詳細は名古屋大学工学研究科・工学部のホームページ <http://www.engg.nagoya-u.ac.jp/> を参照してください。

大テーマ	DP所属先	キーワード
我等、未来の創造主	三菱化学	生命・環境
環境低負荷型材料製造法	日本ガイシ	ナノ・材料
環境負荷を考慮した都市システムの提案	日建設計	環境
地球に優しい材料技術で未来をひらこう	トヨタ自動車	材料
コンピュータ社会における		
どうしたらエネルギー		
燃料電池の原理理解と		
小型グリッパーの要素		

大テーマ	学生が設定した課題
我等、未来の創造主	浮遊する光触媒による流出油処理
	ヘドロは資源だ：メタン発酵と金属溶出
	フラーレンによる老化防止
	人工光合成技術の高度化
	太陽光による環境汚染化学物質の分解

図3 大テーマに対して、学生たちが設定した課題例

現職、名古屋大学大学院工学研究科教授。1951年生まれ。1979年名古屋大学大学院工学研究科博士課程（情報工学専攻）を単位取得退学、同年名古屋大学工学部助手となり、講師、助教授を経て、1996年より現職。1982年工学博士。専門は制御工学であり、フィードバック制御論、振動制御、ロボット制御などの分野で教育研究に従事。

はやかわ よしかず



画像処理技術の開発とその医用画像処理への応用

—画像を見る、画像から見つける、画像を変形する、画像を頼りにガイドする—

森 健策 大学院情報科学研究科助教授

病院等で用いられるCT・MRIといった医用画像撮影装置の進歩は非常に目覚しく、例えば最近のCT装置を人体内部の高精細かつ広範囲な画像をわずか20秒程度の間を取得することが可能となりました。私の研究では、この医用画像を基にして、人体内部を探索しながら（画像を見る）、病気が疑われる部位を自動的に探し（画像から見つける）、必要であれば切り開き（画像を変形する）、そして手術・検査を助ける（画像を頼りにガイドする）手法・システムを開発を行っています。研究結果例を示しながら研究内容を紹介しましょう。図1ではCT像を基にして気管支内部を観察しています。この時、解剖学的名称を自動表示することによって「今どこを見ているのか」をわかりやすくしています。図2は大腸CT像を基に、大腸を切り開いた像、仮想化内視鏡像、CT画像を表示し、大腸ポリープ検査を支援するシステムの画面です。大腸ポリープと疑われる箇所も自動的に検出され、その場所にジャンプすることが可能です。そして、最後は気管支内視鏡ナビゲーションシステムの画面例です（図3）。このシステムでは気管支内視鏡検査前に撮影されたCT像を地図のように使い、内視鏡の現在位置検査中に現在地、目的とする部位までの経路、臓器壁面の向こう側にある他臓器などを表示することが可能です。内視鏡の現在位置の取得は、実際の内視鏡画像とCT画像から生成される仮想化内視鏡画像とを比較することで行っています。これはカーナビゲーションシステムが車の位置をGPSで取得

し、地図上に現在地、目的地までの経路を表示しているのに相当します。詳しい研究内容につきましては <http://www.newves.org/~mori> をご覧ください。

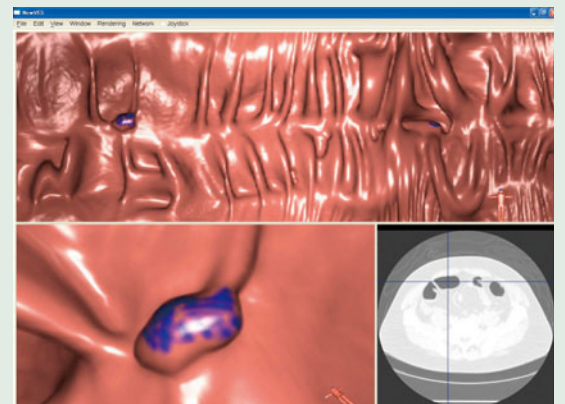


図2 大腸ポリープ診断システムの画面例。大腸の展開増、仮想化内視鏡像、CT像が表示され、異常が疑われる部位を自動的に検出し青くマーキングしています。

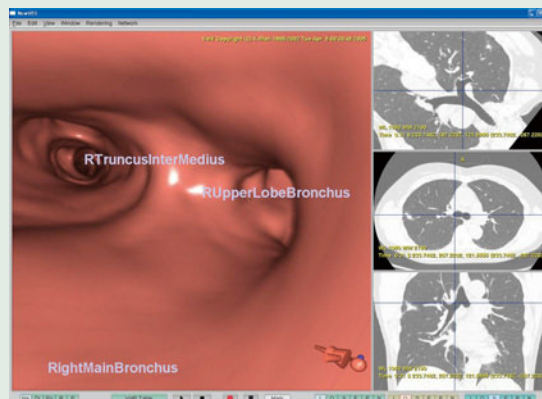


図1 CT像を基に気管支内部を観察している様子。現在の観察位置における解剖学的名称が自動表示されています。

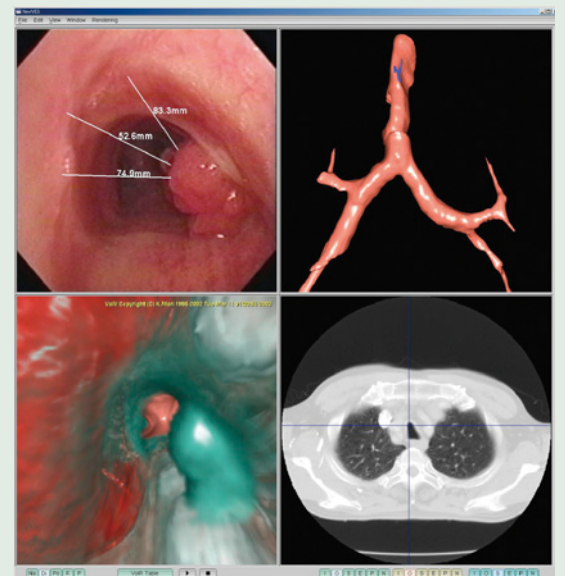


図3 気管支内視鏡ナビゲーションシステムの画面例。内視鏡検査中、実際の内視鏡の現在位置がCT像上に示され、壁の向こう側に存在する臓器が表示されます。これらの表示は実際の内視鏡の動きに合わせて変化します。

名大祭の役割とは

名大祭本部実行委員会委員長／理学部物理学科3年
村田 靖



暖かな風が吹き、蕾だった花たちも咲き誇り、いよいよ名大祭の時期が迫ってきました。学内を見渡してみると、部活サークルの名大祭に向けての熱のこもった練習、名大祭を告知する広報などを目にするようになり、本当にもう目の前だと実感させられます。そこには不安とともに、やはり大きな期待がいっぱいです。

さて名大祭というものの存在を考えてみますと、それは決して単なる娯楽を追及するだけのイベントではなく、社会的に大きな役割を担ったものであると考えます。

近年はインターネットの普及等からみられるように情報化社会が著しく発展し、様々なものがデジタル化され、今や多くの人が一丸となってアナログ的に何かを創り出すことは目まぐるしく減少してきました。また大学生は「モラトリアム」と皮肉され、「社会への無関心」「将来への無目的」などとよく否定的な言葉で象徴されます。しかしこの名大祭は、多くの学生のみなぎるエネルギーに満ち溢れ、そんな学生自らの手によって創られます。名大祭を通して学生は交流し、親睦を深め、団結し、その学生のエネルギーが溢れる素晴らしい祭典を創りだします。

また名大祭はその性質上、その時代の学生を如実に映し出します。それらはもちろんいい面もありますが、それだけでなく今の学生が抱える悪い面もあります。社会で言われる大学・大学生の問題点が非常に色強く表れます。しかし、だからこそ学生がその問題と直面し、見つめなおすこともできます。そうすることで私たちの学生自治活動はより発展し、また地域社会から理解を得ることもできるよ

うになります。

「エネルギーの集結、参加者同士の広い交流・親睦・団結」。そして、「学生が自分たちの学生生活を見直し発展させる」。こうしたものが名大祭の担っている大きな役割であるのでしょうか。そしてこれらはきっと昔から変わらず、これから先にも引き継がれていくはずで

今年の名大祭が去年以上にこの役割をはたし、参加者がそこから多くを発見し、多くを感じ、その後の生活のひとつの足がかりになることを願うとともに、それが実現されるよう努力していきたいと考えています。



1
2

- 1 昨年の名大祭の様子
- 2 活動場所にて

むらた やすし
1984年8月5日生まれ
岐阜県出身

名古屋大学の底力

松川 和彦 工学部・大学院工学研究科総務課長

愛知県で育った私にとって、幼いころから名古屋大学はエリートの育つところで文化の香り高い場所として感じていましたし、小・中・高等学校時代も含めて周囲の多くの人たちがそのような見方であったと思います。その名古屋大学に公務員試験を合格して事務職員として採用されて以来35年を超える勤務を経緯して振り返ってみると、幼い頃から感じていたこの地方でのリーダー校にふさわしい底力があったことを強く感じています。

ただ、勤務35年を経緯した現在、その底力とは何であるかと考えてみますと、名古屋大学としての組織ではなく、在職している教員の方々の研究レベルの高さや名古屋大学卒業生の社会での活躍等本学に関係する方々個々の力によるところが大きかったのではないかと個人的に感じています。例えば、7大学の中でもっとも小規模の大学で、かつ、予算（運営費交付金）は筑波大学よりも少ない状況でありながら、研究面で21世紀 COE での採択件数全国4位であることや学会での教員の方々の活躍等がそれを表しております。さらに、この地方における社会においては、体制側、反体制側を問わずそのリーダーは名古屋大学の卒業生が中心となってリードをしてみえます。特に、近年は、全国規模での活躍に目を見張るものがあります。それは、企業、政界、医療等職種を問わず多くの場所でのリーダーとしての数多く名前を聞くことができ、個人の力による活躍が今までの名古屋大学の底力としてこの地方の中心大学として知らしめてきたと思います。

では、組織としての名古屋大学の底力はどうなのかと思うと若干考えこんでしまいます。21世紀となって、社会が大きく変化し、大学の高度な教育研究をいかにこの社会の発展に貢献できるかの期待が大きく、これは個人の力ではなく大学という組織に、特に総合大学である名古屋大学に求めているであろうと思われ、これに応えるために組織としての大学の底力を大学の構成員が自覚する中で今以上に高めていく必要があるのではないのでしょうか。名古屋大学学術憲章でうたわれている勇気ある知識人の育成、社会への貢献、国際的な連携等多くの課題実現のため、名古屋大学の組織としての底力を見極め、いかに生かしていくかが今後の名古屋大学の発展の鍵となるのではないかと

と個人的に考えております。

組織としての名古屋大学は、平成14年に全学同窓会を発足させ卒業生とのつながりを強める努力をしていることや地域貢献事業への努力の一貫としての社会連携課の設置等々の動きを見ると組織として長年蓄えてきた底力を発揮しようと動きだしたと感ずるのは私だけでしょうか。

さらに、もう一言付け加えれば、組織としての名古屋大学では、国立大学法人としての「経営」の能力が強く求められ、底力を発揮するには「経営」が安定することが重要であり、本来であれば、その中心的主人公となりうる事務職員の能力向上が今一番求められているのではないのでしょうか。



職場にて

エコトピア科学研究所発足

松井 恒雄 エコトピア科学研究所長

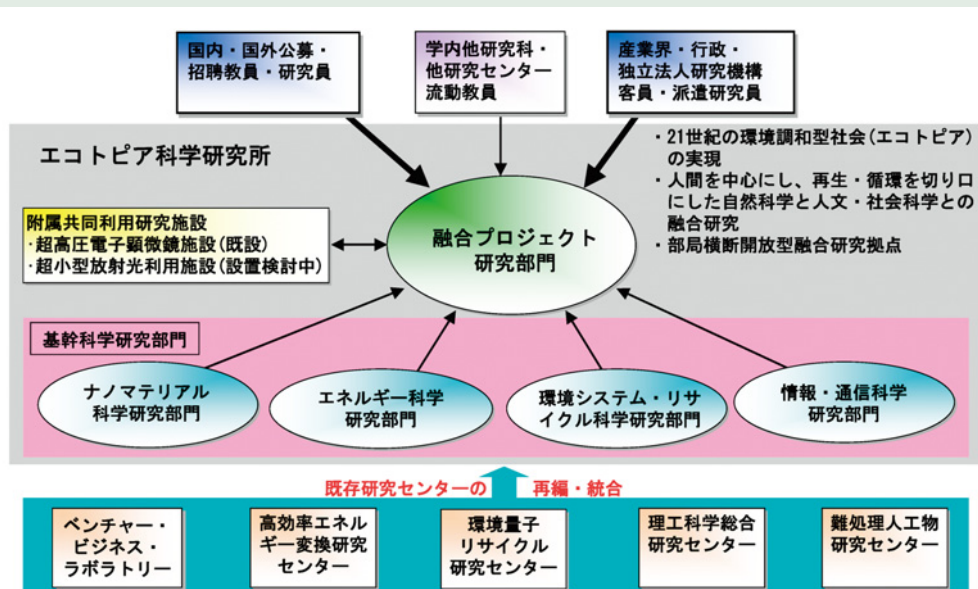
豊かで美しい社会を将来にわたって持続的に発展させていくためには、地球環境負荷を低減した環境調和型社会の実現が必須であり、これは21世紀がめざす理想社会（エコトピア）と考えられます。その実現のためには、『もの、エネルギーおよびそれに付随する情報の循環・再生と人間との調和』を切り口にして自然科学と人文・社会科学が融合した学際研究を行うことがますます重要となってきています。

エコトピア科学研究所は、これら学際融合研究をささえる材料、エネルギー、環境等の基盤研究分野で従来から顕著な実績をあげてきている理工学総合研究センター（人工結晶研究施設（1963年設立）の改組）を初めとする、難処理人工物研究センター、環境量子リサイクル研究センター、高効率エネルギー変換研究センター、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー等を再編・統合した名古屋大学における最大規模の部局横断型融合研究推進組織（研究拠点）であります。本研究所は、平成16年4月に設立されたエコトピア科学研

究部門と融合プロジェクト研究部門への自然科学と人文・社会科学系教員の新たな配置を行い、平成17年4月から研究所として再出発をいたしました。従って、本研究所には、学際融合研究を通して名古屋大学の総合大学としての研究ポテンシャルを一層高めるとともに、新学問分野の創生と新しい学術体系を構築することが期待されています。

一方、大学の社会・地域への貢献は今後ますます重要となりますが、本研究所はものづくりの世界的集積拠点である中部地域を背景にして、融合研究の成果を通して産学官連携を強力に推進し、新産業領域創生にも寄与していく所存です。さらに、人口集積密度の最も高いアジア・オセアニア地域との連携も積極的に進め、この地域の持続的発展に寄与するとともに、世界をリードする国際研究拠点として認められる成果をあげたいと思っております。

教育面では、研究所発足により更により広い人文・社会科学系研究科の大学院教育・人材養成にも努めることになっており、一段と部局横断型融合研究を通して広い視野・学際分野と柔軟な発想を持つ人材育成拠点としての機能も強化します。



現状の人員構成：合計110名
専任教授19名、専任助教授・講師21名、専任助手11名、客員教授8名、非常勤研究員22名、
寄附研究部門（教授2名、助教授（兼務）1名、助手2名、）、兼務教授6名、兼務助教授2名、兼務助手3名、技術職員5名、事務職員8名

地域防災力向上に向けた地域社会との連携協働

—名古屋大学災害対策室の取り組み—

鈴木 康弘 災害対策室長

近年の自然災害の多発により、日本の防災戦略や国土構造の見直しが迫られています。名古屋地域は、2002年から東海地震対策強化地域、2004年からは東南海・南海地震対策推進地域に相次いで指定され、我が国で大規模地震災害の危険性が最も高い地域のひとつになっています。一瞬のうちに数千人が命を落とすような無情な災害を克服することは、「人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献する」と謳われた名古屋大学学術憲章にも合致しています。名古屋大学災害対策室は、これに応えるべく、学内外の様々な防災関係者との協働の取り組みを2002年10月から始めました。

地域防災の鍵は「郷土愛」かもしれません。国家規模で進められる規格化された防災施策では、

真の防災を実現できないことは、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震を見れば明らかで、国の防災計画策定に参与する本学の多くの研究者は、地域行政・市民と大学が一体となった取り組みの重要性に気づいています。郷土の災害脆弱性を真摯に受け止め、住民気質や地域性を大切にする姿勢が、大学の防災研究にも求められています。

2002年度から始まった「中京圏地震防災ホームドクター計画」（文部科学省地域貢献特別支援事業）および環境学研究科が推進する「安全安心プロジェクト」を端緒に、地域の様々な人々とのネットワーク作りがスタートしました。愛知県のほとんどが新たに東海地震対策強化地域に指定され、警戒宣言が発令された場合の秩序の維持が課題となり、「予知技術の限界と心構えのあり方」についてのコメントが地域社会から求められました。また、県や市による被害推定や地震対策の策定、地下構造調査、ハザードマップの作成、各種防災講座等への協力要請も相次ぎました。

地域防災の緊急課題は住宅等の「耐震化」です。来るべき東海・東南海地震で想定される地震動は、名古屋市を含む愛知県の多くの場所で震度6弱以上となり、耐震性の低い住宅の耐震化が必須です。



地域防災交流ホール的一般公開



親子防災スクール



地域防災の議論

地域防災を高める様々な「コト」の企画



啓発書



震動教材「ぶるる」



防災いろはカルタ



木造住宅の耐震教材

防災啓発のための「モノ」づくり

＊災害対策室

「安心・安全なキャンパス整備・維持活動の支援」と「地域社会の防災力向上に寄与する実践研究と社会連携活動」を推進するため、「人文・社会・自然」の学問の壁を越えた実践研究の場として2002年10月に設置。行政・マスコミ・NPO等、幅広い人々との連携の中で、様々な取り組みを進める。

各種の助成制度を用意する自治体や、防災に強いまち作りを目指す市民団体と連携して、耐震化や家具の固定を如何に進めるか？ また、自らが住む場所の災害危険性（ハザード）を正しく理解して、災害の起こりにくい町に改造していくことも長期的な課題です。こうした問題意識を適正に高め、防災意識の高揚を図ることは、防災教育の一級の課題でもあります。2004年度に、本学と愛知県・名古屋市が共同提案して採択された防災研究成果普及事業（文部科学省）「住民・市民のための地域ハザード受容最適化モデル創出事業」は、こうした根本的な問題を提起したものであり、大きな成果が期待されています。

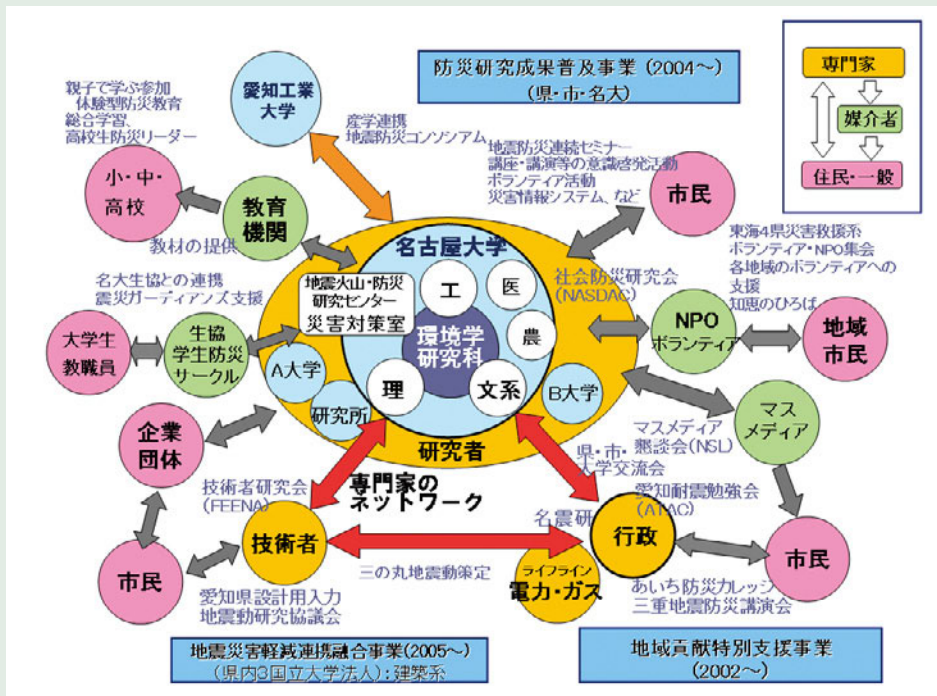
地域防災は、まずは「ヒト」との連携から始まり、知識を正しく伝えて啓発効果を高める「モノ」づくり、そして、適正な防災行動に誘発するための「コト」を企画するという、「三位一体」が重要です。しかもすべての事柄において、大学の単なるアウトリーチでは駄目で、地域のニーズに聴き耳を立て、その効果（顔色）を計りながら、協働することが重要になります。

名古屋大学災害対策室は、「安全・安心なキャンパス作り」に貢献するため、学内において各種の防災事業を進めると同時に、地域防災を推進するホームドクター窓口として、「ヒト・コト・モノ」に関する多様な取り組みをサポートしています（詳細はホームページをご覧ください <http://anshin.sharaku.nuac.nagoya-u.ac.jp/taisaku/>）。特に、地域防災交流ホール（環境総合館4F）は、延べ数千人を超える利用者に支えられ、地域防災を推進するための拠点となっています。

地震のみならず、東海豪雨や伊勢湾台風に代表されるような風水害も、この地域では深刻な問題です。気象災害への対応力強化や、高潮・津波・液状化等への総合的な取り組みも求められています。こうした災害にも適切に対応するため、学内の防災研究や協働の輪を、一層広げることが必要になっています。

地域防災に果たす大学の役割と期待は、このように非常に大きなものがあります。地域社会からの信頼を徐々に獲得しながら、じっくり腰を据えた長期的・安定的な取り組みが求められています。真の「ホームドクターになれるかどうか」の正念場はこれからです。

地域防災に果たす大学の役割と期待は、このように非常に大きなものがあります。地域社会からの信頼を徐々に獲得しながら、じっくり腰を据えた長期的・安定的な取り組みが求められています。真の「ホームドクターになれるかどうか」の正念場はこれからです。



地域防災を支える「ヒト」の輪づくり

情報文化セミナー・シンポジウム I 開催

●情報文化学部

情報文化学部は、3月3日（木）、4日（金）の2日間、環境総合館レクチャーホールにおいて、情報文化セミナー・シンポジウム I 「文理融合型学部における基礎教育の課題と展望」を開催しました。

このシンポジウムは、高度情報化社会の諸問題や地球環境問題に対処する能力を有する脱境界型の人材育成を目指して再編された学部教育カリキュラムを評価改善するため



2日目のディスカッションの様子

に、文理融合型学部教育に造詣の深い学外の有識者を招いて、平成16年度総長裁量経費の援助を受けて実施されたもので、一般を含め40名を超える参加がありました。

初日は、戸田山和久情報文化学部教授・高等教育研究センター長による基調講演『「人類生存のための科学」のとりくみ』から始まり、これを受けて、多鹿秀継愛知教育大学副学長及び新田義彦日本大学大学院総合社会情報研究科教授による講演、さらに、3者による討論が会場からの質疑も交えて行われました。夕刻からは、平野総長や講演者の出席のもと、懇親会が開催され、交流を深めました。

2日目は、黒葛裕之関西大学総合情報学部教授、松田晃一NTTアドバンステクノロジー株式会社代表取締役常務による講演に続き、本学から高橋 誠環境学研究科助教授、鈴木麗璽情報科学研究科助手を交えた4者による討論やフロアとの意見交換が行われました。

両日とも活発な議論が交わされ、充実したシンポジウムとなりました。

上田実教授日本学術会議会長賞受賞記念講演会を開催

上田 実医学系研究科教授（頭頸部感覚器外科学講座）が昨年6月に日本学術会議会長賞を受賞したことを記念して、上田実教授日本学術会議会長賞受賞記念講演会が、3月27日（日）、名古屋市内のホテルにおいて開催されました。

日本学術会議会長賞は、本学では赤崎 勇特別教授に続いての受賞で、ヒト細胞、組織による培養表皮、培養軟骨の開発が科学技術創造立国実現に向けた功績として評価され、産学官連携活動に果敢に取り組む姿勢が他の模範であることが受賞の理由でした。

記念講演では、上田教授が「口腔外科学教室の10年と再生治療」と題して、座長を務めた鳥居修平医学系研究科教授とともに20年前に始めた口腔粘膜の細胞培養についての研究が組織工学的手法を駆使することで全身諸組織が対象になるまで拡大した経過や、その基盤研究を進める一方で市場性を見据えた戦略研究では産学連携を進めるのが大学運営の上でも有効であることなどについてわかりやすく紹介しました。

祝賀会は、藤内 祝医学部教授の開会の辞で始まり、来賓の平野総長、井堂考純日本歯科医師会長、杉浦医学系研究科長、井口医学部附属病院長から祝辞があった後、齋藤

英彦名誉教授（独立行政法人国立病院機構名古屋医療センター院長）の発声により乾杯が行われ、180名余りの参加者全員で上田教授の受賞を祝いました。



上田 実医学系研究科教授

東芝と研究インターンシップ協定を締結

●大学院工学研究科・大学院情報科学研究科

大学院工学研究科及び大学院情報科学研究科は、3月25日（金）、株式会社東芝との間で、大学と企業が協力し、科学技術分野での先導的役割を果たすことができる人材の育成を目的として、インターンシップの実施に関する協定を締結しました。この協定に基づき、平成17年度より、両研究科に所属する大学院学生を対象としたインターンシップを開始しました。



協定書に署名する澤木工学研究科長と阿草情報科学研究科長

このインターンシップは、従来の就業体験に基づくインターンシップとは全く異なり、学術研究を通じて、わが国の将来を担うことができる研究者及び技術者に必要な“幅広い視点からの問題を設定し解決することができる能力”を涵養しようとするものです。このため、両研究科と東芝が協力して研究テーマを設定し、両者の指導のもと、1～6か月にわたるインターンシップの実施と評価が行われます。これによって、専門分野に加え、学際分野の研究開発能力を備えた人材の育成とともに、研究企画・統括等に優れた見識を備えた人材の育成が期待されています。

両研究科では、今後、インターンシップを大学と企業の強力な連携のもと、社会と時代が要請する人材の育成をめざす一つの新しい大学院教育と位置付け、積極的に実施していくことにしています。

世界トップレベルのスーパーコンピュータを導入

●情報連携基盤センター

情報連携基盤センターは、平成17年4月より新スーパーコンピュータシステム Fujitsu PRIMEPOWER HPC2500（3月1日更新）の正式運用を開始しました。

このシステムは、24ノードで構成される分散並列型スカラ計算機で、ノード間は毎秒4GBの高速光ファイバーネットワークで結合されます。各ノードは主記憶容量512GBの共有メモリ型スカラ計算機で、24ノードのうちの22ノードには64個のCPU、残りの2ノードには128個のCPUを搭載し、全体では1664CPUとなります。トータルの演算処理性能は13Tflops、主記憶容量12TB、磁気ディスク容量100TBです。主記憶容量は地球シミュレータを超える世界でもトップレベルの大きさであり、他の大規模計算機センターで作成したアプリケーションプログラムの移植及び実行、大容量データの解析を容易に行うことができます。

同システムは、全国共同利用システムとして、国内の様々な分野の研究者によって使用されます。また、平成16年度に21世紀COEプログラムの革新的な学術分野において採択された「計算科学フロンティア」をサポートする計算資源としての役割も担い、日本全体の計算科学の発展に貢献するものと期待されています。



スーパーコンピュータシステム

シンポジウム「まちとひとを守るために いま何をすべきか」開催

大学院環境学研究科と災害対策室は、3月26日（土）、環境総合館レクチャーホールにおいて、シンポジウム「まちとひとを守るために いま何をすべきか」を開催しました。

このシンポジウムは、平成14～16年度文部科学省地域貢献特別支援事業として、大学院環境学研究科と愛知県・名古屋市の連携で行われた「中京圏地震防災ホームドクター計画」を振り返り、現状の到達点と課題について議論することにより、今後の地域防災の一層の推進に向けて連携を強化しようと開催されたものです。当日は、日頃、一緒になって地域防災活動を進めてきた市民、行政、マスコミ、NPO、大学関係者等から、会場を埋め尽くす115名の参加があり、活発な議論が交わされました。

シンポジウムでは、黒田環境学研究科長から、同研究科で推進する安全安心プロジェクトの流れなどを含む開会あいさつがあった後、同事業を代表して、福和伸夫環境学研究科教授から、この3年間で実施してきた事業を総括して、ヒト・コト・モノ作りによる幅広い地域防災の推進について説明がありました。続いて、基調講演として、小川克郎（名古屋産業大学・欠席のため概要説明）、栗田暢之（NPO



満席の会場との活発な議論の様子



マスメディア関係者によるパネルディスカッション

法人レスキューストックヤード）、岡嶋 守（JR東海・元名古屋市）の各氏が、学・民・官の立場からみた地域防災のあり方と大学への期待・問題提起・提言等を述べました。それぞれ本質を突く示唆に富んだ内容で、次の活動につながる「鍵」が得られました。

午後は、山口 勝 NHK アナウンサーの司会進行により、パネルディスカッションが3部構成で行われました。第一部は、「地域をどう底上げするか、地域防災協働のありかた」と題して、住民の意識を高めて自分と地域を守る活動に向かわせるための行政の施策、地域において強力で防災活動を推進するグループの活動ノウハウ、行政とNPOをつないで支援し、その活動を継続させる大学の立場について議論されました。第二部は、「過去3年間名古屋で何ができたか」と題して、マスコミ関係者と大学・行政により毎月開催される勉強会を取り上げ、これにより地震防災報道のあり方にどのような影響を与えたかが議論されました。第三部は、「大学の貢献のありかた」と題して、地域防災に対する特徴的な活動を行う大学の事例が紹介され、また、大学への要望も出されました。大学の地域貢献について、「自己満足になっていないだろうか」、「本気で参加する組織や人の幅を広げるべきではないか」、「社会が動くような提言を発信すべきではないか」、「大学も地域住民としての意識を持つべきではないか」、「学生の若い力を活かすべきではないか」等の意見が出され、予定時間を大幅に超過する活発な議論が交わされました。

最後に、鈴木災害対策室長から、ホームドクターは日頃の相談を通じて生涯の付き合いが求められるものであり、地域の協働に基づいて中京圏地震防災ホームドクター計画を今後も継続して推進していくことが述べられ、シンポジウムは終了しました。

附属図書館が2005年春季特別展を開催

－ 地域環境史を考える －

附属図書館及び附属図書館研究開発室は、4月4日（月）から27日（水）まで、大学院環境学研究科地理学講座の協力を得て、2005年春季特別展「地域環境史を考える」を開催しました。

今回の特別展は、環境共生が喫緊の課題となるなか、自然環境が人間社会との関わりのなかで利用・維持・改変されてきたことを考えると、まずは、地域において営まれてきた自然利用のあり方やその変容を理解することが必要であるとの溝口常俊環境学研究科教授からの問題提起を受けて企画されたものです。

展示は、同館が所蔵する高木家文書、伊藤圭介文庫、神宮皇学館文庫、岡田家文書などの原資料と、これらに関連諸資料を加えてデジタル処理したエコ（環境共生）コレクションデータベース、地域資料を解析したGIS画像などを用い、山野の過剰利用を背景とする猪や狼などの獣害や柴草山をめぐる紛争を扱った①「山に生きる」のほか、②「川とともに（木曾三川流域）」、③「町の暮らし（名古屋・伊勢）」、④「海への進出（新田開発）」、⑤「田と畑の景観（島畑）」の5部構成で行われました。アンケートでは、「大きな絵図に感動した」、「自然と人間の対立と調和について



展示室

考えさせられた」等の意見が多く寄せられました。

また、関連企画として、4月9日（土）には特別展講演会が開催され、80名を超える参加者は、溝口環境学研究科教授による「地域環境史事始」、伊藤安男花園大学名誉教授による「河川環境変遷と住民対応」、大浦由美生命農学研究科助手による「木曾の森林環境を考える」と題する講演に聞き入るとともに、総括質疑では、「地域（環境）は誰のものか」等で活発な意見が交わされました。

さらに、4月16日（土）に開催された特別展資料講座では、秋山晶則附属図書館研究開発室助手から、展示資料及び公開が始まったエコ（環境共生）コレクションデータベースの解説が行われ、講座終了後も、展示室で熱心に質問をする受講者の姿が見られました。



3名の講師を交えての総括質疑の様子



電子展示

第8回博物館特別展「時を測る」開催中

博物館は、3月23日（水）から7月31日（日）まで、第8回特別展「時を測る－地球誕生から中世まで－」を開催しています。

本学では、「CHIME年代測定法」と「炭素14年代測定法」により、様々な資料の年代測定を行っています。年代測定法の研究を行っている研究者と他分野の研究者が協力して共同研究をできる点が本学の特色であり、第8回特別展ではこれまでに本学で行われてきた研究の成果が展示されています。

展示コーナーには、「最新の研究成果」、「縄文時代と弥生時代の境界は？」、「古墳時代の始まりは？」、「書の真贋を探る」、「石の年代を測る」、「ジルコンの結晶を見てみよう」があり、年代測定法の原理についても触れられています。「最新の研究成果」コーナーでは、平成16年に本学がバーミヤン壁画の下塗りに使われた土に混ぜ込まれた麦わらや、仏像を壁に取り付けていた木片の年代を炭素14年代測定法で測定した結果が展示されています。バーミヤン遺跡が造られた時期については、これまでに様々な意見がありましたが、この結果からバーミヤン遺跡の仏教壁画は5世紀中頃～9世紀中頃に造られたことが判りました。「ジ



特別展を観る来館者



講演する小田年代測定総合研究センター助手

ルコンの結晶を見てみよう」コーナーでは、CHIME年代測定法で分析に用いるジルコンの結晶を実体顕微鏡で見えて、写真を撮ることができます。ジルコンの約10倍の大きさの星砂を使って、鈹物の拾い出し体験もできます。

また、4月14日（木）には、第8回特別展関連行事として、小田寛貴年代測定総合研究センター助手による第38回特別講演会「歴史時代資料の炭素14年代測定」が、博物館講義室において開催され、市民や本学の学生など約150名の参加がありました。

小田助手は、主に遺跡から出土した考古学資料や文書などの歴史資料の年代測定研究に携わっており、特別展の「書の真贋を探る」コーナーに展示されている古文書の年代も測定しています。講演では、まず炭素14年代測定法の原理を説明し、藤原定家を書いたといわれていた文書が年代測定の結果から偽物と判明した研究等を紹介しました。続いて、年代測定において、今後の文理融合研究がどう行われるべきかについて解説がありました。講演後の質疑応答では、会場から多くの質問があり、活発な意見交換が行われました。

法学研究科が 国際大学生交流セミナー開催

大学院法学研究科は、2月21日（月）から3月6日（日）までの2週間、2004年ユネスコアジア文化センター（ACCU）・ユネスコ青年交流信託基金事業「大学生交流プログラム」として、学术交流協定校のカンボジア王立法経大学、ハノイ法科大学、ラオス国立大学法学政治学部から、それぞれ学部学生4名及び教員1名を招き、国際大学生交流セミナーを開催しました。

セミナーでは、各国における法文化を素材に法政治制度の現状を比較しながら将来のアジア全体の司法政治制度について考察することを目指し、教員、弁護士の石畔重次氏、トヨタ自動車(株)法務部の大脇衛雄氏及び森島昭夫名誉教授による講義が行われました。後半の学生によるディスカッ

ションは、テーマから進行内容まですべて学生が企画、運営しました。また、実地見学会として、名古屋地方裁判所、名古屋刑務所等を訪問し、週末には、愛知万博のパートナー市町村の美浜町、田原市及び幸田町の協力を得て、ホームステイが行われました。



セミナーの様子

附属農場が農業教育公園内に 案内板を設置

大学院生命農学研究科附属農場は、地域貢献特別支援事業の一環として併設している農業教育公園内に42枚の案内板を設置しました。

この事業では、数年前から農業小学校、農業ふれあい教室、自然観察会、講演会等を開催しています。昨年度は、農業ふれあい教室を6日、講演会を4回、自然観察会を1回開催し、多くの人が農場を訪れるようになったため、案内板の設置が必要となってきました。昨年度の農業教育公園の運営に対しては、総長裁量経費による予算措置がされており、その一部で農場入り口に大きな案内板、各施設等に研究内容を紹介する立て看板、その他に注意看板を設置しました。

4月9日（土）と10日（日）には、同公園内の通称「桜坂」の桜は満開となり、桜のトンネルを見物する多くの人で賑やかでした。また、田植えが始まる前の水田の準備、牛が放牧される前の草地などを見学する人も多く、案内板が大いに利用されていました。



農業教育公園内の案内板

大幸キャンパスグラウンドで 少年サッカー教室開催

●総合保健体育科学センター



少年サッカー教室の様子

総合保健体育科学センターと(株)名古屋グランパスエイトは、3月13日（日）、大幸キャンパスグラウンドにおいて、(財)住宅管理協会中部支部との共催で、少年サッカー教室を開催しました。

この教室は、名古屋グランパスエイトの「ふれあいサッカーひろば」と住宅管理協会の「団地少年サッカー教室」を、同センター教員の協力で同時に実施したもので、大幸地区周辺に住み、地元サッカークラブに所属する180名の子供が、元Jリーガーを含むコーチから楽しく指導を受けました。

同センターでは、これまで、公開講座「親子で楽しむスポーツ教室」を通じ、グランパスエイトコーチとの情報交換を行っており、スポーツ科学研究の成果を活かした教育実践の場となっています。今年度も、6月の土曜日に、同教室（ラグビー、レスリング、サッカー又はバスケットボールを予定。教職員の家族の参加も可）を開催する予定です。

新任役員・部局長等の紹介

●理事（病院・施設整備・環境安全関係担当）・副総長



杉浦 康夫
(すぎうら やすお)

専門分野：解剖学、神経解剖学、神経科学

〈略歴〉

昭和50年4月 名古屋大学助手（医学部）
昭和57年3月 筑波大学講師（基礎医学系）
昭和63年10月 福島県立医科大学教授
平成8年11月 名古屋大学教授（医学部）
平成10年4月 名古屋大学医学部附属動物実験施設長（～H12. 3. 31）
平成12年4月 名古屋大学教授（大学院医学研究科）
平成14年4月 名古屋大学教授（大学院医学系研究科）
平成15年4月 名古屋大学医学系研究科長（～H17. 3. 31）
平成17年4月 名古屋大学理事（病院・施設整備・環境安全関係担当）・副総長

●理事（財務・広報関係担当）・事務局長



豊田 三郎
(とよだ さぶろう)

〈略歴〉

昭和41年4月 埼玉大学採用
昭和51年7月 文部省大学局高等教育計画課
昭和53年10月 文部省大臣官房総務課国会班
昭和55年6月 文部省大臣官房総務課国会班調査係長
昭和57年4月 文部省大臣官房総務課国会班連絡係長
昭和59年8月 文部省高等教育局企画課専門職員
昭和60年4月 文部省高等教育局企画課大学設置審議会係長
昭和62年4月 高知大学庶務課長
平成元年1月 文部省大臣官房総務課課長補佐（秘書官事務取扱）
平成7年7月 文部省大臣官房総務課連絡調整官（兼）国会連絡調整室長
平成13年9月 文部科学大臣秘書官（政務）
平成15年9月 文部科学省大臣官房付
平成15年11月 文化庁文化部宗務課長
平成17年4月 名古屋大学理事（財務・広報関係担当）・事務局長

●高等研究院長

北住 炯一
(きたずみ けいいち)

専門分野：西洋政治史（ドイツ政治史）

〈略歴〉

昭和46年4月 名古屋大学助手（法学部）
昭和50年4月 愛知学院大学専任講師（法学部）
昭和54年7月 愛知学院大学助教授（法学部）
昭和60年1月 愛知学院大学教授（法学部）
昭和61年4月 名古屋大学教授（法学部）
平成11年4月 名古屋大学教授（大学院法学研究科）
平成12年4月 名古屋大学大学院法学研究科長・法学部長（～H14. 3. 31）
平成17年4月 名古屋大学高等研究院長（～H19. 3. 31）



●情報文化学部長

佐野 充
(さの みつる)

専門分野：電気化学

〈略歴〉

昭和56年4月 名古屋大学助手（教養部）
昭和60年4月 名古屋大学講師（教養部）
昭和63年2月 名古屋大学助教授（教養部）
平成5年10月 名古屋大学助教授（情報文化学部）
平成7年4月 名古屋大学教授（情報文化学部）
平成13年4月 名古屋大学教授（大学院環境学研究科）
平成17年4月 名古屋大学情報文化学部長（～H19. 3. 31）



新任役員・部局長等の紹介

●大学院医学系研究科長・医学部長

濱口 道成
(はまぐち みちなり)

専門分野：腫瘍生物学、腫瘍生化学、細胞生物学
(略歴)

昭和55年4月 名古屋大学助手 (医学部附属癌研究施設)
昭和58年4月 名古屋大学助手 (医学部附属病態制御研究施設)
昭和59年7月 名古屋大学助教授 (医学部附属病態制御研究施設)
平成5年12月 名古屋大学教授 (医学部附属病態制御研究施設)
平成9年7月 名古屋大学アイソトープ総合センター分館長
平成13年4月 名古屋大学教授 (大学院医学研究科附属病態制御研究施設)
平成14年3月 名古屋大学大学院医学研究科附属病態制御研究施設長
平成14年4月 名古屋大学教授 (大学院医学系研究科附属病態制御研究施設)
平成14年4月 名古屋大学大学院医学系研究科附属病態制御研究施設長
平成15年4月 名古屋大学教授 (大学院医学系研究科附属神経疾患・腫瘍分子医学研究センター)
平成16年4月 名古屋大学大学院医学系研究科副研究科長 (～H17. 3. 31)
平成16年5月 名古屋大学大学院医学系研究科附属医学教育研究支援センター長 (～H17. 3. 31)
平成17年4月 名古屋大学大学院医学系研究科長・医学部長 (～H20. 3. 31)



●太陽地球環境研究所長

藤井 良一
(ふじい りょういち)

専門分野：磁気圏・電離圏物理学
(略歴)

昭和52年8月 国立極地研究所研究系助手
平成4年4月 名古屋大学助教授 (太陽地球環境研究所)
平成7年8月 名古屋大学教授 (太陽地球環境研究所附属共同観測情報センター)
平成10年4月 名古屋大学教授 (太陽地球環境研究所)
平成16年4月 名古屋大学総長補佐 (研究推進担当)
平成17年4月 名古屋大学太陽地球環境研究所長 (～H20. 3. 31)



●地球水循環研究センター長

上田 博
(うえだ ひろし)

専門分野：気象学
(略歴)

昭和53年8月 国立防災科学技術センター総理府技官
昭和60年7月 国立防災科学技術センター第1研究部主任研究官
昭和60年12月 北海道大学助教授 (理学部)
平成7年4月 北海道大学助教授 (大学院理学研究科)
平成13年1月 名古屋大学教授 (大気圏科学研究所)
平成13年4月 名古屋大学教授 (地球水循環研究センター)
平成17年4月 名古屋大学地球水循環研究センター長 (～H19. 3. 31)



●留学生センター長

江崎 光男
(えざき みつお)

専門分野：国際経済学
(略歴)

昭和43年5月 大阪大学助手 (社会経済研究所)
昭和44年4月 京都大学助手 (東南アジア研究センター)
昭和52年11月 京都大学助教授 (東南アジア研究センター)
平成3年4月 名古屋大学教授 (大学院国際開発研究科)
平成14年4月 名古屋大学大学院国際開発研究科長 (～H16. 3. 31)
平成17年4月 名古屋大学留学生センター長 (～H19. 3. 31)



●生物機能開発利用研究センター長

小林 迪弘
(こばやし みちひろ)

専門分野：生物相関機構学 (昆虫病理学)
(略歴)

昭和52年4月 名古屋大学助手 (農学部)
平成2年11月 名古屋大学助教授 (農学部)
平成9年4月 名古屋大学教授 (農学部)
平成11年4月 名古屋大学教授 (大学院生命農学研究科)
平成16年4月 名古屋大学教育研究評議員 (～H17. 3. 31)
平成17年4月 名古屋大学生物機能開発利用研究センター長 (～H19. 3. 31)



●先端技術共同研究センター長

大日方 五郎
(おびなた ごろう)

専門分野：制御工学、ロボット工学、人間工学
(略歴)

昭和52年4月 東北大学助手 (高速力学研究所)
昭和55年11月 東北大学講師 (高速力学研究所)
昭和55年11月 秋田大学講師 (鉱山学部)
昭和59年4月 秋田大学助教授 (鉱山学部)
平成2年4月 秋田大学教授 (鉱山学部)
平成10年4月 秋田大学教授 (工学資源学部)
平成13年3月 名古屋大学教授 (大学院工学研究科)
平成14年4月 名古屋大学教授 (先端技術共同研究センター)
平成16年4月 名古屋大学教授 (エコトピア科学研究機構先端技術共同研究センター)
平成17年4月 名古屋大学教授 (先端技術共同研究センター)
平成17年4月 名古屋大学先端技術共同研究センター長 (～H19. 3. 31)



新任役員・部局長等の紹介

●核燃料管理施設長

榎田 洋一
(えのきだ よういち)

専門分野：原子核工学
(略歴)

昭和59年4月 東京大学助手(工学部)
昭和62年8月 東京大学講師(工学部)
平成元年5月 東京大学助教授(工学部)
平成5年8月 三菱重工業株式会社
平成8年9月 名古屋大学助教授(工学部)
平成9年4月 名古屋大学助教授(大学院工学研究科)
平成13年4月 名古屋大学教授(環境量子リサイクル研究センター)
平成16年4月 名古屋大学教授(エコトピア科学研究機構)
平成17年4月 名古屋大学核燃料管理施設長(～H19. 3. 31)



●学務部長

中村 直規
(なかむら なおき)

(略歴)

昭和45年9月 名古屋大学採用
昭和47年6月 文部省
昭和61年4月 宮崎大学庶務課長
昭和63年4月 放送教育センター制作部企画管理課長
平成元年4月 放送教育センター管理部研究協力課長
平成3年4月 国立特殊教育総合研究所庶務課長
平成5年4月 京都大学厚生課長
平成6年4月 横浜国立大学教務課長
平成8年4月 電気通信大学教務課長
平成11年4月 名古屋大学学務課長
平成13年4月 金沢大学学生部長
平成15年1月 名古屋工業大学総務部長
平成15年10月 一橋大学学務調整官
平成16年4月 一橋大学学務部長
平成17年4月 名古屋大学学務部長



●医学部・大学院医学系研究科事務部長

松川 保
(まつかわ たもつ)

(略歴)

昭和46年7月 熊本大学採用
平成4年4月 浜松医科大学会計課長
平成7年4月 名古屋大学医学部附属病院管理課長
平成8年7月 文化庁伝統文化課専門員
平成10年7月 文部省高等局医学教育課補佐
平成13年4月 弘前大学経理部長
平成15年4月 東北大学企画調整官
平成16年4月 東北大学基盤推進総主幹
平成17年4月 名古屋大学医学部・大学院医学系研究科事務部長



●医学部・大学院医学系研究科事務部次長

中島 勉
(なかじま つとむ)

(略歴)

昭和40年4月 名古屋大学採用
平成14年4月 名古屋大学工学部・大学院工学研究科経理課長
平成16年4月 名古屋大学経済学部・大学院経済学研究科事務長
平成17年4月 名古屋大学医学部・大学院医学系研究科事務部次長



●医学部・大学院医学系研究科事務部次長

藤井 茂男
(ふじい しげお)

(略歴)

昭和44年10月 名古屋大学採用
平成9年4月 和歌山高等専門学校会計課長
平成12年4月 鳥根医科大学医事課長
平成14年4月 三重大学医学部管理課長
平成16年4月 名古屋大学医学部・大学院医学系研究科管理課長
平成17年4月 名古屋大学医学部・大学院医学系研究科事務部次長



●工学部・大学院工学研究科事務部長

鈴木 和夫
(すずむら かずお)

(略歴)

昭和39年3月 名古屋大学採用
平成12年4月 名古屋大学大型計算機センター事務長
平成14年4月 名古屋大学情報連携基盤センター事務長
平成15年4月 名古屋大学理学部・大学院理学研究科・大学院多元数理科学研究科事務長
平成17年4月 名古屋大学工学部・大学院工学研究科事務部長



新任役員・部局長等の紹介

●附属図書館事務部長

早瀬 均
(はやせ ひとし)



〈略歴〉

昭和46年7月 岡山大学採用
平成4年4月 鹿児島大学附属図書館情報サービス課長
平成7年4月 学術情報センターシステム管理課長
平成10年4月 東北大学附属図書館情報サービス課長
平成13年4月 北海道大学附属図書館情報管理課長
平成15年1月 東京学芸大学附属図書館事務部長
平成16年4月 東京学芸大学学術情報部長
平成17年4月 名古屋大学附属図書館事務部長

資 料

役員

総長	平野 眞一
理事（総務・企画関係担当）・副総長	山下 廣順
理事（人事・労務関係担当）・副総長	森 英樹
理事（教育関係担当）・副総長	若尾 祐司
理事（病院・施設整備・環境安全関係担当）・副総長	杉浦 康夫

理事（研究・国際交流関係担当）・副総長	山本 進一
理事（財務・広報関係担当）・事務局長	豊田 三郎
理事（法務関係担当）	林 光佑 ※
監事	木村 洋一
監事	湯本 秀之 ※

※印は非常勤

経営協議会委員

学外委員	
(独)農林漁業信用基金副理事長	加藤 鐵夫
名城大学学長	兼松 顯
お茶の水女子大学学長	郷 通子
(財)長寿科学振興財団理事長	小林 秀資
トヨタ自動車(株)代表取締役副社長	齋藤 明彦
東レ(株)代表取締役社長	榊原 定征
日本ガイシ(株)代表取締役会長	柴田 昌治
中日新聞社常務取締役	角田 牛夫
伊藤忠商事(株)取締役会長	丹羽宇一郎

学内委員	
総長	平野 眞一
理事・副総長	山下 廣順
理事・副総長	森 英樹
理事・副総長	若尾 祐司
理事・副総長	杉浦 康夫
理事・副総長	山本 進一
理事・事務局長	豊田 三郎
医学部附属病院長	井口 昭久
附属図書館長	伊藤 義人

(五十音順)

教育研究評議会評議員

総長	平野 眞一
理事	山下 廣順
理事	若尾 祐司
理事	山本 進一
文学研究科長	杉山 寛行
教育発達科学研究科長	村上 隆
法学研究科長	佐分 晴夫
経済学研究科長	友杉 芳正
情報文化学部長	佐野 充
理学研究科長	大峯 巖
医学系研究科長	濱口 道成
工学研究科長	澤木 宣彦
生命農学研究科長	松田 幹
国際開発研究科長	中西 久枝
多元数理科学研究科長	浪川 幸彦
国際言語文化研究科長	近藤 健二
環境学研究科長	黒田 達朗
情報科学研究科長	阿草 清滋
環境医学研究所長	児玉 逸雄
太陽地球環境研究所長	藤井 良一
エコトピア科学研究所長	松井 恒雄
附属図書館長	伊藤 義人

医学部附属病院長	井口 昭久
総合保健体育科学センター長	島岡 清
文学研究科	江村 治樹
教育発達科学研究科	寺田 盛紀
法学研究科	定形 衛
経済学研究科	荒山 裕行
理学研究科	佐藤 正俊
医学系研究科	古池 保雄
工学研究科	小野木克明
生命農学研究科	服部 重昭
国際開発研究科	櫻井 龍彦
多元数理科学研究科	金銅 誠之
国際言語文化研究科	吉村 正和
環境学研究科	林 良嗣
情報科学研究科	横澤 肇
教育研究共同施設連合選出	江崎 光男
教育研究共同施設連合選出	巽 和行
評議会選出	浅井 滋生
評議会選出	河野 正憲
評議会選出	近藤 孝男
評議会選出	本城 秀次

総長補佐

目標・評価担当	松下 裕秀
法人化担当	市橋 克哉
組織・運営担当	千葉 秀夫
情報担当（広報担当兼務）	坂部 俊樹
男女共同参画担当	金井 篤子
人権（苦情処理）担当	竹中 千里
人権（セクハラ）担当	唐澤かおり
教養教育担当	山本 一良
入試・入試改革担当	小川 正廣
鶴舞地区担当	祖父江 元
施設整備担当	谷口 元
労働安全担当	中村 正秋

産学官連携担当	竹田 美和
産学官連携担当	太田美智男
国際連携担当	早川 操
社会連携・社会貢献担当	戸田山和久
研究・教育支援担当	中村 新男
研究推進担当	芝井 広
研究推進担当	岡本 耕平
研究協力担当	成瀬 量
財務担当	渡辺 芳人
予算・会計担当	瀧本 寛
広報担当（情報担当兼務）	坂部 俊樹

部局長等

本部		
事務局	事務局長	豊田 三郎
総務企画部	総務企画部長	千葉 秀夫
	総務広報課長	服部 幸博
	企画課長	山下 洋
	人事労務課長	筏津 隆広
	人材開発主幹	虎澤 千恵
財務部	財務部長	瀧本 寛
	財務課長	佐藤 規朗
	財務調整主幹	井沢 文雄
	財務調整主幹	青山 正晴
	経理課長	芳賀 洋和
	資産管理課長	樋口 博則
	契約課長	今津 範通
	情報企画課長	多田 正和
	研究協力・国際部	研究協力・国際部長
研究支援課長		伊藤 信浩
社会連携課長		石代 真敏
国際課長		北條 泰親
留学生主幹		荒木 浄子
施設管理部	施設管理部長	山口 博行
	施設企画課長	東 栄一
	施設整備課長	細野 俊治
	施設管理課長	加藤 好孝
学務部	学務部長	中村 直規
	学務企画課長	平野 俊彦
	教務主幹	中村 平
	学生総合支援課長	大野 昭彦
	入試課長	小柳津 享
教養教育院長		若尾 祐司
高等研究院長		北住 炯一
文学部・文学研究科	文学研究科長・文学部長	杉山 寛行
	文学部・文学研究科事務長	根津 郁夫
教育学部・教育発達科学研究科	教育発達科学研究科長・教育学部長	村上 隆
	中学校長	吉田 俊和
	高等学校長	吉田 俊和
	教育学部・教育発達科学研究科事務長	浅田 貞彦
法学部・法学研究科	法学研究科長・法学部長	佐分 晴夫
	法学部・法学研究科事務長	横田 圭介
経済学部・経済学研究科	経済学研究科長・経済学部長	友杉 芳正
	国際経済動態研究センター長	高桑宗右エ門
	経済学部・経済学研究科事務長	石原 達夫

情報文化学部	情報文化学部長	佐野 充
	情報文化学部・情報科学研究科事務長	山本 明博
理学部・理学研究科	理学研究科長・理学部長	大峯 巖
	臨海実験所長	澤田 均
	理学部・理学研究科・多元数理科学研究科事務長	森本 正廣
医学部・医学系研究科	医学系研究科長・医学部長	濱口 道成
	医学教育研究支援センター長	太田美智男
	神経疾患・腫瘍分子医学研究センター長	高橋 雅英
	医学部附属病院長	井口 昭久
	大幸医療センター長	濱島 信之
	医学部・医学系研究科事務部長	松川 保
	事務部次長	中島 勉
	事務部次長	藤井 茂男
	総務課長	山秋 悦宏
	学務課長	河西 志郎
	管理課長	青山 生修
工学部・工学研究科	工学研究科長・工学部長	澤木 宣彦
	工学部・工学研究科事務部長	鈴木 和夫
	総務課長	松川 和彦
	経理課長	伊藤 庄平
	教務課長	伊藤 幹夫
農学部・生命農学研究科	生命農学研究科長・農学部長	松田 幹
	農場長	横田 浩臣
	演習林長	柴田 叡弑
	山地畜産実験実習施設長	福田 勝洋
	農学部・生命農学研究科事務長	篠崎太嘉男
	総合保健体育科学センター	総合保健体育科学センター長
国際開発研究科	国際開発研究科長	中西 久枝
多元数理科学研究科	多元数理科学研究科長	浪川 幸彦
国際言語文化研究科	国際言語文化研究科長	近藤 健二
環境学研究科	環境学研究科長	黒田 達朗
	地震火山・防災研究センター長	安藤 雅孝
	環境学研究科・地球水循環研究センター事務長	永田 幸男
情報科学研究科	情報科学研究科長	阿草 清滋
環境医学研究所	環境医学研究所長	児玉 逸雄
	宇宙医学実験センター長	児玉 逸雄
	環境医学研究所事務長	柳 育生
太陽地球環境研究所	太陽地球環境研究所長	藤井 良一
	ジオスペース研究センター長	小島 正宜
	太陽地球環境研究所事務長	社本 好由

エコトピア科学研究 所	エコトピア科学研究所長	松井 恒雄
	ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー長	竹田 美和
附属図書館	附属図書館長	伊藤 義人
	医学部分館長	山内 一信
	附属図書館事務部長	早瀬 均
	情報管理課長	牧村 正史
	情報サービス課長	臼井 克巳
	情報システム課長	郡司 久
	地球水循環研究センター	地球水循環研究センター長
情報連携基盤 センター	情報連携基盤センター長	渡邊 豊英
	情報連携基盤センター事務長	伊藤 正彦
学内共同教育研究施 設	アイソトープ総合センター長	西澤 邦秀
	遺伝子実験施設長	石浦 正寛
	留学生センター長	江崎 光男
	物質科学国際研究センター長	巽 和行
	高等教育研究センター長	戸田山和久
	農学国際教育協力研究センター長	竹谷 裕之
	年代測定総合研究センター長	鈴木 和博
	博物館長	足立 守
	発達心理精神科学教育研究センター長	本城 秀次

	法政国際教育協力研究センター長	杉浦 一孝
	生物機能開発利用研究センター長	小林 迪弘
	先端技術共同研究センター長	大日方五郎
	情報メディア教育センター長	山本 一良
	施設計画推進室長	谷口 元
	大学文書資料室長	加藤 鉦治
	廃棄物処理施設長	中村 正秋
	核燃料管理施設長	榎田 洋一
	評価企画室長	松下 裕秀
	学生相談総合センター長	鈴木 國文
	セクシュアル・ハラスメント相談所長	近藤 孝晴
	社会連携推進室長	戸田山和久
	産学官連携推進本部長	山本 進一
	災害対策室長	鈴木 康弘
	国際学術コンソーシアム推進室長	早川 操
	男女共同参画室長	金井 篤子
	情報セキュリティ対策推進室長	坂部 俊樹
	留学生相談室長	松浦まち子
	法務室長	松浦 好治

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成17年4月1日～4月15日]

記事	月日	新聞等名
1 名古屋弁護士会は愛知県弁護士会に名称変更 佐分晴夫・法学研究科教授：グローバルに通用する活動を	4. 1 (金)	中日(朝刊)
2 第42回読売農学賞 道家紀志・生命農学研究科教授ら8人受賞 5日に授賞式	4. 4 (月) 4. 6 (水)	読売
3 科学技術振興機構は2005年度戦略的創造研究推進事業の発展研究で近藤孝男・理学研究科教授、松本邦弘・同教授ら29件の採択課題決定	4. 4 (月)	日刊工業
4 高等研究院が新規採択プロジェクト5件発表	4. 5 (火)	中日(朝刊)
5 ここに技あり：伊藤繁・理学研究科教授 青色LEDで植物を「生きたまま」北極圏から直送	4. 5 (火)	日経(朝刊)
6 大地震、そのとき…：福和伸夫・環境学研究科教授は外を歩くとき「一番危ないのは看板。よく落ちる」と注意を促す	4. 5 (火)	中日(夕刊)
7 科学技術振興機構は2005年度戦略的創造研究推進事業として既存の7領域に新たに「構造制御と機能」(岡本佳男・本学名誉教授)など9領域を加えた16領域で研究提案を募集	4. 5 (火)	日刊工業
8 活写：Photo by 藤井亜矢子さん・平成16年度本学卒業生	4. 5 (火)	中日(朝刊)
9 5日 学部、大学院合わせて4556人が入学式 平野真一総長は「夢を実現するよう努力を」	4. 5 (火)	中日(夕刊) 毎日(夕刊)
10 附属図書館2005年春季特別展「地域環境史を考える」27日まで開催	4. 6 (水)	毎日(朝刊)
11 名古屋駅ロータリークラブは6日椿賞贈呈式挙行 奥宮正哉・環境学研究科教授を表彰	4. 7 (木) 4. 8 (金)	朝日(朝刊) 中日(朝刊)
12 老年学：井口昭久・医学系研究科教授 「格好いい老人」目指す	4. 8 (金)	朝日(朝刊)
13 東海地方3月の地震：林能成・災害対策室助手	4. 8 (金)	読売
14 留学生会は新入留学生の生活支援を目的として行う春のバザー出品物募集	4. 9 (土)	読売
15 時のおもり：池内了・本学名誉教授 名古屋気質にひと言 日本をリードする気概持て	4.11 (月)	中日(朝刊)
16 博物館が中学生のためのネイチャーウォッチングを5月7日開催	4.11 (月)	中日(朝刊)
17 学生之新聞：新一年生に学長式辞 平野真一総長「世界へ、日本へ鋭い目を向けて」	4.12 (火)	中日(朝刊)
18 情報連携基盤センターは4月からスーパーコンピュータの運用を開始 石井克哉・情報連携基盤センター教授は「今以上に多くの課題を同時進行できる」と期待	4.12 (火)	中日(朝刊)
19 中日新聞主催 第13回愛知万博専門部会 堀内守・本学名誉教授、日本ガイシ会長・柴田昌治・全学同窓会副会長ら出席	4.13 (水)	中日(朝刊)
20 トムソンサイエンティフィックが1994年から2004年までの11年間で論文の引用数が多い日本の研究機関を発表 本学は世界ランキング97位、日本ランキング5位	4.13 (水)	朝日(朝刊) 日刊工業
21 2005年度中京テレビの番組審議会委員に的場正美・教育発達科学研究科教授ら	4.13 (水)	読売
22 2005年度東海テレビの番組審議会委員に福和伸夫・環境学研究科教授ら	4.13 (水)	中日(朝刊)
23 博物館で開催中の特別展「時を測る—地球誕生から中世まで」の特別講演会開催 4月14日に小田寛貴・年代測定総合研究センター助手、5月12日に山本直人・文学研究科教授、6月5日に赤塚次郎・愛知県埋蔵文化財センター調査課主査	4.13 (水)	中日(朝刊)
24 横浜事件再審決定に思う：克服されるべき現在 森英樹理事 60年間も引きずったこの国の理不尽を思う	4.13 (水)	中日(夕刊)
25 中部大学公開講座「森から人へ いのちの水脈」5月から6月にかけて開催 5月18日に只木良也・本学名誉教授の「文明と森林 人の営みと森の盛衰」	4.14 (木)	朝日(朝刊)
26 訃報：大塚新太郎・本学名誉教授	4.14 (木)	中日(朝刊) 朝日(朝刊)
27 ブラザー工業の若手技術者・田中誠さん・本学卒業生 奇術は技術に通ず	4.14 (木)	朝日(朝刊)
28 近藤孝男・理学研究科教授、中嶋正人・科学技術振興機構研究員らのグループ 世界初「体内時計」を試験管の中で再現	4.15 (金) 4.16 (土)	中日(朝刊) 他5社
29 研究スポット：覚醒下開頭術 西脇公俊・医学系研究科助教授は「麻酔薬の血中濃度をシミュレーションでき、覚醒時間も調整できる」と話す	4.15 (金)	中日(朝刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

3月23日(水)～7月31日(日)

場 所：博物館
開館時間：10時～16時
休 館 日：月・火曜日
ただし祝休日は開館
入 場 料：無料

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

第8回名古屋大学博物館特別展

テ ー マ：時を測る—地球誕生から中世まで—



6月3日(金)～7月22日(金)毎週金曜日

場 所：文系総合館カンファレンスホール
募集対象：一般社会人、大学生・大学院生
募集人数：60名(先着順)
申込期間：5月20日～5月27日必着
(郵送にて受付)
受講費用：7,200円

[問い合わせ先]
大学院国際言語文化研究科事務室
052-789-5245

平成17年度大学院国際言語文化研究科公開講座

テ ー マ：日本像を探る—外から見た日本・内から見た日本—

6月5日(日)

場 所：博物館講義室
時 間：13時～

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

第40回名古屋大学博物館特別講演会

講 師：赤塚次郎(愛知県埋蔵文化財センター)
演 題：邪馬台国時代の東海の風景
*講演後、ギャラリートークもあります。

6月7日(火)

場 所：環境総合館レクチャーホール
時 間：17時30分～19時

[問い合わせ先]
災害対策室 052-788-6038

第9回名古屋大学防災アカデミー

講 師：石黒 耀(作家)
演 題：震災列島・日本に生きる

6月17日(金)～7月8日(金)

場 所：中央図書館4階展示室
時 間：10時～17時
休 館 日：6月23日(木)

[問い合わせ先]
附属図書館情報管理課庶務掛
052-789-3667

附属図書館2005年企画展

テ ー マ：説話(はなし)の書物—小林文庫本を中心に



6月30日(木)

場 所：博物館講義室
時 間：15時～

[問い合わせ先]
博物館事務室 052-789-5767

第41回名古屋大学博物館特別講演会

講 師：水垣桂子(産業技術総合研究所)
演 題：どこにでもある電子が時を刻む

7月2日(土)

場 所：中央図書館5階多目的室
時 間：13時～15時

[問い合わせ先]
附属図書館情報管理課庶務掛
052-789-3667

附属図書館2005年企画展 ギャラリートーク

テ ー マ：説話集、その豊穡なる世界
口 演：渡辺信和(同朋大学)、阿部泰郎(名古屋大学)

開催月日・場所・問い合わせ先等	内容
7月26日(火) 場 所：高等総合研究館カンファレンスホール 時 間：17時～ [問い合わせ先] 研究協力・国際部研究支援課高等研究院掛 052-788-6051	第10回高等研究院セミナー 講演者Ⅰ：鮎京正訓法政国際教育協力研究センター教授（高等研究院流動教員） 「アジア諸国に対する法整備支援」（仮題） 講演者Ⅱ：松原隆彦理学研究科助教授（高等研究院流動教員） 「宇宙の構造から宇宙の起源を探る」（仮題）
8月6日(土)～10月7日(金) 場 所：博物館 開館時間：10時～16時 休 館 日：土・日曜日、祝休日 入 場 料：無料 [問い合わせ先] 博物館事務室 052-789-5767	第6回名古屋大学博物館企画展 テ ー マ：核分裂絵巻
8月14日(日) 場 所：IB 電子情報館 (他に三重・大阪でも実施) 時 間：10時～16時30分 参加資格：高校生、ジュニアは中学生が対象 (小学生は5年生以上) 参 加 料：1,000円 申込手続：6月下旬に要項が出来る予定。 以降応募を開始 (ハガキによる申込)	第16回数学コンクール・第9回ジュニア数学コンクール 第6回数学コンクール論文賞 応募要項に出題する問題に対し、論文（個人又は共著）を受け付ける（8月末日） ※終了後に採点を行い、各コンクールの優秀者には11月3日(祝)の表彰式において 賞状及び記念品を贈呈する
[問い合わせ先] 研究協力・国際部社会連携課 052-788-6144	

[新コーナー]

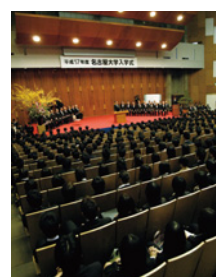
- 教育のデザインとプラクティス
本学で行われている様々な授業の試みやその考えなどを紹介します。
- 知の未来へ - 若手研究者の紹介
本学の若手研究者(37歳以下)の研究を紹介します。
- 職員から
本学で働く事務職員、技術職員、看護師やコ・メディカルを紹介します。
- 地域にひらく
本学の社会貢献活動について様々な角度から紹介します。
- 発展する名古屋大学
教育研究組織の充実について紹介します。

名大トピックス No.144 平成17年5月31日発行
 編集・発行/名古屋大学広報委員会
 本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは総務広報課にお寄せください。
 名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)
TEL. 052-789-2016 **FAX.** 052-789-2019 **E-mail** kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
 (<http://www.nagoya-u.ac.jp/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

豊田講堂で行われた入学式で、新入生を前に、辞を述べる平野総長



37 名大史を見てきたクスノキ

名古屋市立大学の山の畑キャンパス（瑞穂区瑞穂町）は、かつては名大のキャンパスでした。その歴史は古く、1908（明治41）年の旧制第八高等学校（八高）創設までさかのぼることができます。戦後は名大教養部となり、1964（昭和39）年、東山キャンパスの教養部校舎（現共通教育・情報文化学部棟）建設と交換する形で、名古屋市に譲渡されました。

すでに当時の建物はありませんが、校庭跡は「剣ヶ森」として多くの樹木を残し、八高・名大時代の景観を現在に伝えています。中でも古いのが、以前このコーナーで紹介した「八高青春像」の脇および西方にあるクスノキです。直径約1.5mで、正式な測定はされていませんが、樹齢100年前後のものではないかと言われています。

クスノキの古木といえば、樹齢700～800年をほこる伊勢神宮、それよりやや若い熱田神宮のものが名古屋近辺の双壁をなします。しかしそれ以外は単独の古木はあるもののごく新しく、山の畑のクスノキは、地域における学校史のモニュメントとしてだけではなく、植物学的にも貴重なものです。その他にも同キャンパスには、創立当初に本館前へ植えられ、八高のシンボルとも言われた大ソテツが残されています。またこうした巨木は、周囲の気温を下げる効果もあるそうです。

このような、文化財としても自然の記念物としても高い価値を持つ樹木を、ぜひ長く保存して後世に伝えていきたいものです。



- | | | |
|---|---|------------------------------------------------|
| 1 | 2 | 1 名市大・山の畑キャンパス（写真中の数字で示したものが、樹齢100年後と言われるクスノキ） |
| | 3 | 2 東山キャンパスに移転する直前（昭和38年頃）の名大瑞穂キャンパス（教養部） |
| | | 3 名市大のクスノキ（名市大・谷本英一教授撮影） |